ヒヨウ柄の女神たち

～なにわのオカン騒動記～

藤井玲子 文／絵

関西から松山へきてもうじき丸三年になる。春になれば、おそらくまた夫の転勤に伴いどこかの町に移り住んでいることだろう。引っ越してきたのも春だったから、やはり出ていくのも春がキリがいいな。春一番の風のようにビュン！と去っていきたい。でも実際は、なんだなんだなんだ今のは!?みたいにさんざんに人を振り回し、引っかき回して出ていくんだろうな。

☆　☆　☆

この三年でたくさん友達もでき、この町に慣れ親しむ自分を得意に思っていた。ほんとは甘いのが好きなクセに「みかんはちょっと酸味があった方がええ」と通ぶってみたり、学校の名前を「シノタン」だの「聖カタ」だの略してみたり。

「伊予弁」もすっかり板につき（?）、「今日は冷やいのぉ」と調子に乗ると、友人に「レイコちゃんの伊予弁はおじいさんっぽい」と指摘された。大正生まれのニシオカ先生と遊んでばっかりいたからだろうか。ホンモノへの道はやはり遠い。

友人たちとのこんな日常生活も途切れる日が来るのか。

出て行く時に未練がましくならないように適度な距離を保っておくつもりだったが、オトナになってすっかりあつかましくなってしまい、無防備な好奇心まるだしで、いろいろなところへ出かけたくさんの人に会った。

「愛媛は保守的でしょ？」地元の人と親しくなると必ずといっていいほど聞かれるフレーズだ。「さぁ、どうやろ。」と当たり障りのない答えをする。

「でもえーところやろ？魚はうまいし、三越もあるし、そこそこなんでも揃うし…」。

「三越」はともかく、でも思っていることを先に言われるとちょっとイジワルな気持ちになる。そこそこ、ねぇ…。なんでもあることは、ある。でもなにかケッテイテキにナイものがアル。なんだかなぁ…。なかなか切れない痰のように喉元に

引っかかっていた。

二〇〇三年春。私は松山市の広報紙で「みんなのまつやま夢工房」という公聴課主催の勉強会の募集記事を見つけた。テーマは「みんなの地域福祉」。両親が介護サービスを受けていて、福祉に興味があったこともあって、早速応募した。

最初の会合に集まったのは二十四人。アドバイザーの大学の先生があいさつに立った。「これからはなんでも行政まかせではなく、市民が工夫し知恵を出し、支えあって地域で暮らしていくことが求められている」みたいなことを話した。

まぁ、確かに福祉を支えるのは財政的にはしんどいし、地域で暮らせるにこしたことはないのだろうけど…。でもなんで「福祉」の勉強会に「経営学部」のセンセイなんやろ？。

二十四人は三班に分かれた。私の班は社協の人、企業で福祉業務を担当しているニイチャン、ＮＰＯのおっちゃん、障害児を持つお母さん、視覚障害があるニイチャンなど九名。日頃から思っていることを話し合う友達ができそうだ、とうれしくなった。

しかし話し合いが始まると、「地域リーダーの育成」「民間資金等の活用」「ワンストップサービス」「第三者評価」といった言葉が乱れとんで、現場や家庭での具体的な問題から組み立てる話し合いにならない。

「第三者評価制度」についても「告発型は過激」だそうで、「行政と施設の橋渡し役」と位置づけられた。そんなんで施設は良くなるんやろか。

勉強会の後は、近くの居酒屋で親睦会。そこで、商店街の活性化などをやっている「まちづくり」コーディネーターのおじさんと議論になった。

「住民主体とは聞こえがいいけど、最低限の保障を民間に委ねるのは行政の怠慢では。質の良いサービスを選択する力がある市民なんて、ほとんどいないのでは」みたいなことをわたしが言うと、「経済動向を考えると自分の生活は自分で守らなければいけなくなる。各自が意識を高めサービスを選択する力を持たなくてはいけない」と言って、「キミの考えは古い制度にどっぷり漬かっている。また論争しようね」と笑いながら付け加えやがった。キィ～ッ！！　それじゃわたしがまるで社会主義か共産主義みたいやんかっ！！

その場で言い返すこともできず、家に帰って夫に話すと「アンタは社会主義でも共産主義でもあらへん。ご都合主義や」とサラリと言った。またしてもキィ～ッ！！

怒り収まらず、知り合いの保健師のオバチャンにこのときの話をした。「地域で支えあう、言うても近所のオバチャンが親切でやるボランティアと、行政がやる保健や福祉の間にはちゃんと線を引かなアカン」と言った。そっか、「地域の力を見直す」といった「まちおこし」的なものと、行政が担うべき社会保障をごっちゃにして「地域福祉」というからおかしいんやな。

そんなおり、二〇〇四年春『坂の上の雲』記念館整備事業に五億五千万円の市債を発行するという二ュースが広報紙に載った。

「税収減と高齢化から今までのような福祉サービスの維持はできません。もう施設は造りません。お年寄りも障害者も地域で支えあって暮らしましょう」と福祉では「ハコモノ否定」なのに、中身も決まってない記念館に市民から借金をしていいの？

市のホームページを見ると「坂の

SUE 末 MIT
未光歯科
TEL なろう むしばだロ 976-6480 松山市久米窪田町675-1

上の雲のまちづくり」の基本理念が載っている。秋山兄弟や子規の「リアリズム」「合理性」を称え、「人にやさしい社会を実現するためにはリアリズムに基づく合理的な考え方が必要」と書いてある。「坂の上の雲のまちづくり」によって経済が潤い福祉教育の財源確保につながる、と市は説明する。でも、ほんまやろか？「今はお金がない」という「リアリズム」にもとづき、「自分のことは自分でやってくれ」という「合理性」やないやろね。

「坂の上の雲」には、高等教育を受け、「立身出世」を夢見た青雲の志のおぼっちゃまは登場しても、市井の庶民の姿は見えてこない。金持ちにしか選挙権がなく、家でも女性は言いたいことも言えないような時代から何を学べというのだろう。

公民館に坂の上の雲の文庫本が配られPTAは「坂の上の雲ウォーキングラリー」を催している。そのうち子どもたちが学校で「坂の上」を読んで、ゆかりの地を課外学習で歩いて、遠足で記念館に行って、「あきやまきょうだいはいえがびんぼうでぐんじんになったけど、ほんとうはせんそうにはんたいで、あとでせんせいとおぼうさんになりたかったとききました。せんそうはいけないなぁ、とおもいました」なんて感想文を書くんやろか。

行政が小説を取り上げることで、地域や教育の場に知らず知らずのうちに浸透してくる。そんな危うさを感じる。

昨年十二月、大阪市大正区にある知人のヘルパーステーションを訪ねた。五年ぶりに会うイナミネさんは大阪のオカンのお約束通り、ヒョウ柄のパンツ姿で表れた。

「どない？松山？えーとこやろ？わたし昔温泉行ったことあるワ」

「いやぁ、それがね…」と「坂の上の雲のまちづくり」について語った。

おみやげに持っていったタルトを「甘っ！わぁ、甘っ！！」と文句をたれながらほおばっていた他のおばちゃんたちが、「なに、なに、どないしたん？」と身を乗りだしてきた。

「なんやのん？それっ！！」

「おかしいんちゃうっ！！」（オバチャン、ツバが飛んできてるって！）

「そんなん、精神、って…。だってあれ、戦争のハナシやろ？マズイんとちゃう？」

いや、だから、その、わたしがすすめてるのでなく、それに反対してるんやけど……。

直感で「オカシイ」と感じ、ストレートに口に出す。大阪のオカンの心は誰にも縛り付けることはできない。オカンたちが女神のように（ウソ）輝いてみえた。

2005 Vol.22

監視社会と道後の湯婆ーば

藤井玲子 文／絵

「安心・安全のまちづくり」。この言葉を毎日当たり前のように見聞きしている。テレビや新聞、或いは通学路にある「まもる君の家」みたいな看板だったり。いろいろな形で「安心・安全」に接する機会が増えているような気がする。それなのに安心どころか、かえって居心地の悪さを感じるのはわたしだけだろうか。

きっかけは五月十三日付け愛媛新聞だった。「大洲地区防犯協会と大洲署が市内七十六の学校に不審者制圧用の刺股を贈呈」という記事を見つけた。写真には「真剣な表情で刺股を使った訓練に臨む大洲市の学校などの代表者」とある。「さすまた」だって？なんじゃそりゃ？今は二十一世紀やで。いやいや待てよ。「坂の上の雲」のまちづくりで明治時代に学ぶ街もあるくらいだから、江戸時代グッズも結構マジかもしれない。なぁーんてひとりツッコミを入れていた。以来、おもしろ半分で新聞記事の切り抜きを始めた。すると、五月二十四日「四国中央市三島幼稚園で刺股を使って不審者対応防犯訓練」、六月十四日「刺股で不審者に対抗する田之筋小教員（西予市）」、六月十五日「学校の防犯対策に役立ててもらおうと愛媛銀行が松山市に刺股二〇〇本寄付」、六月十六日「土居町土居小で不審者対応訓練。四月に購入した刺股と催涙スプレーを使い、非常通報装置も試した。」…と「さすまた」だけでもこんな調子。自主防災や防犯、子どもの安全に関するものを含めると毎日のように載っている。六月三日付けでは「刺股のような長い棒はかえって危険と特殊警棒や催涙スプレーを使うように指導している」という松山セーフティディフェンス研究所のコメントも。これってかえって物騒な気がしない？六月十五日「久万高原町で不審者対応訓練。不審者に扮した久万高原署員が模造のかまを振りまわし侵入。担任や教頭が竹の棒で応戦する間に、子ども達を避難させ校内放送を聞いた教員が駆けつけ椅子などで取り囲み、到着した警察官が

刺股で取り押さえた」。うーんストーリーが凝っている。小学生の子どもがいる知人から「学校の防犯訓練があまりにリアルで怖がる子どももいる」という話を聞いた。怖がらせてどーするよ!? だんだん笑えなくなってきた。

地域では通学路にお母さん達や犬の散歩ついでのご近所さんが立ち、登下校の子供を見守っている。それに比べて子供の前でこれみよがしにアイスクリーム見せびらかして食べる大人（私）なんて、子供を守る以前に大人失格だ。しかも転勤者だし子供もいないので、町内会やPTAにも御縁がなく、お化粧もせず昼間っからプラプラしてる。我が身をふり返ると「不審かも…」とヒヤリとする。アニメ好きで見た目もちょっとオタクっぽい四十代の独身男性の友人に「アンタなんか子供に声かけただけで犯罪者扱いかもよっ」と言うと「ええっ～!!」と悲壮な声を上げた。いや冗談ごとではない。奈良県では、子どもに不安を与えるような「声かけ」などを禁じ罰則規定を設けた「声かけ」禁止条例が六月に可決した。

総合運動公園へサイクリングの帰り、汗を流そうと道後温泉に行った。風呂場でタオルをゆすぎ桶の湯を流したとき、気を付けてそっと流したつもりが隣のばあさんの足下に掛かってしまった。ばあさんは口コツに迷惑そうな顔をして「こう！」とだけ言って股の間から湯を流すしぐさを見せた。いや、しかし待てよ。じゃあ、湯船のまわりにベッタリ座るのやら、歯磨きやら、全裸で開脚柔軟体操とゆーのはどうなんよ!? お仲間は見て見ぬふりで、与しやすい相手を選んで言ってへんっ？ 監視のまなざしは、強い者から弱い者（私！）へ注がれ、自分たちのコミュニティに身を置く限りは安全で、秩序を乱す者は攻撃や排除の対象とされてしまう。監視社会におけるマイノリティ排除の論理ってこーゆーカンジかも!? とはいえ、手押し車でやって来て、おしゃべりしたり、背中を流しあってるおばあさん達の姿は微笑ましい。地べたに座ってたり、たまに小言を言われるのも地域の文化。こうやって温泉に来れる日が一日でも長く続いてほしいなぁと思う。

みんなで見張りあって、刺股振りかざして不審者を追っ払ったところで安心は得られない。それより大阪のオバチャンみたいに「どないしたん？しんどいんか？アメちゃんお食べ」やないけど、アグレッシブに受け入れていけばいいのに。強く、優しく、あつかましく。大阪のオバチャンのしたたかさを見習ってはどうだろうか。

2006.1-23

乱れ打ち遍路紀行

藤井玲子 文／絵

二〇〇四年の二月から、「お遍路さん」をしている。週末や休暇を利用して、順序関係なくいろんなところから歩き始めるから、超「区切り打ち」の「乱れ打ち」。この年末は徳島の日和佐から高知県境まで歩いた。そこで関西出身というおもろいオッチャンお遍路さんに出会った。

「一日何キロ歩いてるんですか？」と私が聞くと、「一日二十キロ」とオッチャン。「なんだ、男性なのに」とケナすと、「お遍路さんは速く歩くことが目的になってるやろ？ワタシはスローペースが自慢なんや」という。とにかく遠回り、海岸沿い、人の通らない道を歩くのだという。私たちもオッチャンに従い、道路から海岸へ出て砂浜を歩いた。しばらくすると整備された人工海岸になった。オッチャンは「前はこんなんと違ごてんけどな」とさみしそうに言った。

「もう何回くらい回ってるの？」

オッチャンは答え慣れているのかスラスラと、「お遍路は終わりがない永遠。まぁ、世俗的に言うと二、三周かな」ととぼけて言った。

海南町の生活感あふれる漁港を見て、「こういう昔ながらの小さな港の景色ってええな」と私が言うと、「さすが、関西人。ワタシと気が合うなぁ」とけったいなほめ方をする。マウンテンパーカー姿の私たちに「なんで白装束着ないの？」。「だって、動機が不純やし、本気の人に悪いワ」。

そもそもお遍路は、正月太り解消のため夫が提案したものだった。納経だってスタンプラリー感覚だし。だから「お遍路さんですか」と尋ねられるとさすがにバツが悪く、「遍路道を歩いてるんです。」なんて答えてしまう。そうクドクド言い訳する私に、「なんでやねん。歩きの人はみんなそんなもんやで。むしろバスで来るオバちゃんらのほうが本気やで」。ふーん、なるほどなぁ。「だいいち、お遍路に理由なんてないねん。お大師さんはなんでも許してくれはるねん。自分らも、もう一〇〇％お遍路さんやねんから、白いの着い！で、これからは野宿しい！地面の上に寝っ転がって、見上げたら天井は夜空やねんで。春は桜の木の下、冬は満天の星空。気持ちええ

でぇ〜」。

「じゃあ夏は？」

「マムシが寝袋に入ってくるから、夏はアカン！」

休憩所になっている東屋の前でオッチャンは「今日はここで野宿する」と言って、私たちはそこで別れた。

おととしの五月の連休は高知を歩いた。四万十川の渡し船がある下田の集落では家々に鯉幟と、港町らしく大漁旗が掲げられていた。子供がいるだけでなんとなく町に活気があるような気がする。この四万十川の渡し船は四万十大橋ができた後も、歩き遍路のために残されているのだそうだ。地元のおじさんが市に委託されて一人で切り盛りしている。

そこで渡し船を待っていると、おばあちゃんが渡船代として百円玉二枚を「お接待」してくれた。年金暮らしのお小遣いから申し訳ないなぁ…。しかも見るからにご利益なさそうな私たちに。おばあちゃんは嫁入り前に遍路歩きをしたのそうだ。昔はそういう習慣だったという。楽しかった思い出を懐かしむように話してくれた。

遍路歩きをしてみると、どんな所にも人が住み、生計を立てているということが、なんだかとてもかけがえがなく大切に思えてくる。こんなささやかで小さな暮らしが守られることを願わずにいられない。

そんな私のおセンチ（古い？）気分を一掃してくれるのが、あのコイズミさんの「改革をやめない」のポスターだ。シャッター商店街や寒村であのポスターを見ると「ホンマにここでやってええのん？」と沈んだ気持ちになる。「競争」を前提とした「改革」って過疎に限らず、たいていの地方にとっては不利なんとちがうかなぁ。「地域活性化」どころか、合併させて役場をなくして、ますますさびしくさせてるやん‼そんなことをブツブツ言いながら歩く。不悪口（悪口を言わない）・不瞋恚（怒らない）。う〜ん…。

「お接待」といえば、「エヒメにはお接待の心がある」と聞かされたことがある。それがしばしば「地域福祉」の勉強会や、福祉教育の例として、行政の口からが出てきた時、う〜む、と唸ってしまう。もしかして、少子・高齢化だの財政難だの理由をつけて、本来行政がやるべき仕事を、市民の「お接待の心」や「ボランティア精神」にゆだねようとしてへん？それはちょっと都合が良すぎるで。（お大師さまが許しても私は許さんっ！）「民営化で仕事を放棄ばかりしとらんと、行政こそ市民に対してお接待の心を持ちなさい！」とツッコミを入れたくなるのだ。「お接待の心」を利用するなんて、遍路歩きでダイエットを企てる私らよりバチ当たりやで！

あ〜あ、また怒っちゃった…。お遍路さん失格。お大師さま、ごめんなさい。

2006-24

市民運動ダイエットのすすめ

腕を大きくのばして
ビラまきの運動〜っ!!

藤井玲子 文／絵

あれは忘れもしない、二〇〇五年一月六日。「坂の上の雲記念館」起工式前日のことだった。

「坂の上の雲のまちづくり」の問題を考える人たちと、起工日に配るビラの準備をしていたら、市議T子が息を切らしてやってきた。

「大変やワイ！　明日、起工式にバリケード張るんやと。他の市議に『気を付けなさい』って言われたワ！」

「バリケード」??　安保闘争とか成田空港のアレか？　いつの時代やねん。それこそ歴史認識に問題アリや。ってゆーか、ワタシらは「過激派」かいっ?!

化粧品はラ＊コムでないと肌が荒れ、靴はフェ＊ガモでないと足にマメができ、バッグはグ＊チ、香水はエル＊ス…ミッション系お嬢サマ女子大（？）出身にして、元バブリーOLのワタシがなんで「過激派」扱いされなアカンねんっ！…と、鼻息を荒くしていると、そばにいたTGさんが、

「へぇ〜、そういう時代もあったんだァ〜」と訝しそうにワタシを見る。な、なによ、も、文句ある?!

市長は「いつでも一割の反対派がいるものだ」と口癖のようにいっている。地元経済誌でも、「ああいう運動をしている人は政治運動に関わっている人が多い」と発言していた。

ち、ちょっと待ってヨ。ワタシなんて松山市主催の勉強会「夢工房」にも「市民参加」して、市長を前に発表だってしたんだから。言ってみたら「まちづくり」に熱心な善良な市民ヨ。

「おかしいよ」と疑問の声をあげた途端、「政治運動」「少数の反対派」「一部の市民」と言われ、これじゃまるで「非国民」。トホホ…。

神戸の山の手（の病院）に生まれ、商社マンと専業主婦の保守的な家庭に育ち、「激しい運動」はもとより、「軽い運動」も固く禁じられていた。

「運動オンチ」のままオトナになった私は、会社で上司が「ベトコン！」と罵る姿を見て、「マザコン」とか「ボディコン」の類だと思ってた。

松山に来た最初の夏、県庁前で歴史教科書の採択を巡り、おじさん達がタ暮れ時まで「ハンスト」してるのを見て、

「『半スト』なのに半日以上もやっている。」と不思議に思い、さらに、「一日中やったら、『全スト』になるんやろか」と、考えた。

「ハンスト」を「ハンガーストライキ」の略と知らず、「半日ストライキ」だと思いこんでいたのだ。

そんな私が、ほどよい規模の地方都市に初めて暮らすことになり、「ああ、神戸と違って自分の意見を届けやすそうやな。役場の人とも顔が見える関係を築けそうやな。所詮私は余所モンやし、しがらみもないから、この際、自分の思ったことは伝えていこう！」と、関西で言う、いわゆる「いちびり」根性丸出しでいくことにした。

そこへ突如降ってきたのが「坂の上の雲のまちづくり」だった。

人の痛みに敏感な人や、私のように遠慮がちで慎み深い（？）人にとって、イケイケドンドンの「坂の上の雲のまちづくり」の評判はよくない。

「夢や目標に向かって努力することのすばらしさ」は結構だけど、お祭り騒ぎの陰にすすめられているのは、夢どころか暮らしや命を奪いかねない政策ばかりだ。

例えば、「坂の上の雲記念館」の総工費に三十億円。ロープウェイ駅舎改築に七億円。ロープウェイ街の電柱の地中化など景観整備に十二億円。最近では、観光・生活情報を提供する「まちかど案内情報端末機器」を市内十三カ所に設置するのに、二億六千万円も予算を計上するなど、「まちづくり」には大盤振る舞い。

その一方で、母子・寡婦家庭への貸付金を回収するために、「償還推進員」をわざわざ採用したり、現職警察官二人を市職員として採用し、生活保護費の未返還金の回収を強化している。月々払う介護保険費の高さにいたっては中核都市の中で日本一という。

大学の先生も飲み屋でグチってばかりないで、ちゃんと批判してよっ!!

そうそう、で、起工式。

結局、「バリケード」なんかは無く、張られていたのはサーカスみたいな雨よけ用テントだった。どうやら行政側は、私たちがバリケードを張ると思っていたようだ。（というか、「バリケード」は基本的に反権力側が張るものらしい）。拍子抜けするとともに、行政の人たちも緊張に満ちた「前夜」を送っていたのだなぁ、と想像すると気の毒というか、笑える。

近頃、お腹のぜい肉と政治に不満を感じているアナタ！健康のために適度な「運動」はいかがでしょうか。

デモ行進すればダイエットになるし、ビラを書けば脳も活性化するし、街で配れば足腰も丈夫になる。「ハンスト」でプチ断食もできる！経験者より未経験者を歓迎!!

2007-25

グループホーム退去トラブル

藤井玲子 文／絵

昨年冬、神戸で暮らす父が、それまでいた民間のグループホームを退所することになった。

「ウチの施設ではもう無理です。最近は食事の時もむせやすく、このままでは肺炎をおこしかねません。医療施設かどこかに移った方がいいのでは」と言う。

契約上では、「要介護5」まで面倒を見ることになっている。父の介護度はそれより軽い「4」。なのに「無理」とはどういうコト？　そもそも、むせやすいなら、入院をすすめる前に、食事や介助に工夫をしてほしい。施設の力不足はシロウト目にも明らかだったので、風邪をこじらせ入院したのを機に施設を退所することにした。

父のいた部屋を掃除し、退所の手続きをすませると、職員の女性が、

「ではこれで改装工事に入らせてもらいます」と言う。

なんでわざわざ断るんやろ？と、なんとなくひっかかりながら施設を後にした。

一ヶ月ほど経って、施設から届いた請求書には日割り家賃の他に、「お部屋クリーニング代」として六万五千円が記載されていた。

アパートやマンションなどの賃貸契約では、畳やふすまの入れ替えや壁紙の貼り替えに伴う改装費は、「経年劣化」として扱われ、「貸し主負担」が原則だ。よほど意図的に破損しない限り、「敷金」から改装費を差し引かれることは許されない。

関西人の「納得いかへんことにお金は支払わない」センサーがにわかに騒ぎ出す。

事務的な間違いかと思い、施設に確認の電話を入れると、職員は、

「お父様の場合は車いすをご使用だったので、床の傷みが特に激しく、部屋に臭いもこもっ

ており、壁紙も爪でめくったり、痰をこすった跡があったので貼り替えました」
と説明する。
掃除したときにはそんな目立った汚れやにおいなどなかった。
一応「クリーニング」の中身を確認しようと、改装業者から明細を送ってもらう。
すると・・・

《内装工事》
壁クロス貼り替え（33㎡）　49500円
床ワックス　10000円
クロス廃材捨て物　2500円

「クロス33㎡」といったら、部屋の壁全部だ。自分で立ち上がることのできない父が、一人で移動して壁紙を傷つけられるはずがない。もし傷が付いたというなら、介助者がぶつけた可能性が高い。
「そんなに部屋がにおってましたか？」と聞くと、「におい は気にならなかった」と改装業者。
そもそも部屋が臭うのなら、それはこまめに父をお風呂に入れてあげなかったり、日常的に掃除を怠った施設側の責任じゃないの？　おまけに廃棄費用まで請求するなんて。明細を取り寄せて正解。

入居時の重要事項説明書には「入居金」として「一年間に十万円償却」とだけ書いてある。
「三十万円の入居金のうち、入居されていた二年間分、二十万円は何もしてもしなくても償却するお金です。のこり十万円から改装費用を差し引きます」という施設側の主張。
「『何もしなくても償却』はおかしいでしょ？　『償却』って、改装や修理にお金をあてることじゃない？」と指摘すると、
「間違えました。入居金はリビングや風呂、共有スペースの修繕・管理費に遣います」
「それこそ毎月支払っている管理費から充当されるべきや！」
こちらの問いに施設の答えがクルクル変わる。

市の介護福祉課に相談すると、
「県の消費者センターか国保連の苦情相談窓口へお問い合わせ下さい」
さすが優秀な市職員。市民の些末な問題は他に委託（丸投げ）して、業務の効率化を心がけていらっしゃる。

国保連の苦情相談窓口に電話すると、国交省の「賃貸住宅標準契約」や厚労省のガイドラインにも改装費用について、「貸し主負担の原則」が定められている、と言う。
さらに、グループホームが県の認可を受ける際にも「入居金」を「利用者の不注意等により居室または共同スペース、備品等に破損または汚損を生じさせた場合の修繕費や損害賠償に充てるための費用」と位置づけている。
つまり、施設側の請求が、全く不当なものであることがわかった。
わからんちんの施設に私がいくら法的根拠を述べたところで、理解できないことは察しが付くので、
「行政として施設を指導して

ひめ歯科クリニック
井上知則
〒七九一―八〇一三　松山市姫原二―六―一一
TEL　〇八九―九二四―〇八八八

ほしい」と言うと、
「民と民の契約なので行政は介入できない」。
う～ん、ものは言いよう。
・・・って、感心してる場合じゃない。じゃあ施設とのトラブルはどこに言えばいいのヨ?!
「では、認可した責任があるのだから、同じ事がおこらないように事業者や利用者に広報を通じて認識を広めてほしい」と私。
「おっしゃることはもっともですが、広報するかどうかは自治体の裁量ですので・・・」
じゃあ、アンタ、このまま泣き寝入りする人が増えていってもいいってワケ?!

たまたま知り合いに敷金問題に詳しく、自ら離婚訴訟の泥沼にいる弁護士（エックス氏）がいたので、相談する。
エックス氏は、
「ホンマは相談料取られんねんで」
と、もったいぶって前置きしながら、
「賃貸借契約自体が物の使用の対価として賃料（居室料）を支払う契約であり、物を使用すればその損耗が生じるのは当然予定されるから、通常の使用による損耗の対価は既に賃料でカバーされるものと考えられる。この考え方は最高裁判決平成十七年十二月十六日でも示されています」
と説明してくれた。
で、「どう？裁判する？」とニヤリ。
「え、えーわ。遠慮しとく。介護で裁判してる時間ないし。あんまりモメたくないし」
すると、机を叩かん勢いで、「闘って『権利』を獲得していくのが民主主義の歴史だ！」とわめきだす。あー、ハイハイ・・・。

施設宛にこの最高裁判決とネットで検索した神戸地裁の判決文を参考にするよう渡したら、
「わかりました。グループホームも民間の賃貸住宅の契約と同じなんですね」
と、こちらの言い分を認めたものの、
「じゃあ、4万円でどうですか？」って値切ってくる。
・・・って、全然わかってへんやんかっ!!

こちらは金額の問題ではなくて（お金も大事だけど）、法律で定められている入居金の認識を正しく持ってしてほしいのだ。
正しい精算書が届くまで、退所してから三ヶ月経っていた。

2007-26

詳解？！サカクモミュージアム

藤井玲子 文／絵

二〇〇七年春に開館した「坂の上の雲ミュージアム」に、「文句を言うために生まれてきた女」K子さん（以下敬称略）と行ってきた。

K子は正面玄関を入るなり、「なにこれっ、なにこれっ??」と不安げに見回している。三角の扉とホール、三角柱のテレビ画面に、三角に配置されたソファ、斜めに天井を渡る廊下、斜線模様の壁に囲まれ、軽い船酔い状態に陥ったようだ。

「どうぞ、順路はこちらです」。

親切な職員さんの案内も振り切り、「わかってるっ！」と八つ当たり。

「私、真っ直ぐ立ってる？垂直ってどんなだっけ？」

ガラにもなくよろめくK子。ダメじゃん、最初からこれじゃあ…。

いや、ここでメゲていては総工費三〇億円、年間維持運営費一億四千万円（十九年度）が浮かばれない。

立っているのがしんどくなり、しばしホールのソファに座り込み、まちづくりを紹介するビデオを鑑賞。

フィールドミュージアム構想だの、市民参加のまちづくりだの、これまでさんざん広報で聞かされてきたことを、ここでもやるか？てか、松山以外の人にとっては、どーでもいいお役所情報でしかない。

大音量にまくし立てられるように、次へ進むと、先には萬翠荘の緑を背景に喫茶コーナーが。

「喫茶コーナー」と言えば、二〇〇五年六月。

工事も始まり、展示内容や、歴史認識など、どう折り合いをつけるか大変な時期に、山折哲夫氏ら著名人を集めた最後の「展示専門委員会」ではこんな発言が相次いだ。

▼「休憩できる空間が必要。できればとびきりおいしいコーヒーが飲めたら一番いいわけですが」

▼「とびきり上等なコーヒーを出すことですな。松山で一番おいしいコーヒーだっていう」

▼「ここへ行けばおいしいコーヒーが飲めるという」

（「展示専門委員会議事録」より）

「展示内容」そこそこに、周回遅れのカフェブームみたいな話を繰り広げていた。

まさか、「カフェ・バルチック」

なんてのができてへんやろね、と心配してたら、セルフサービスのコーヒーメーカーと砂糖とフレッシュが置いてあるだけだった。（コーヒー一五〇円）

日頃「お接待の心」って言ってるワリに、いくら経費節減とはいえ、ぞんざいな。「いっそ、お接待でタダにせいっ!!」（K子）

最初の展示物は、ゆるやかな傾斜の廊下の壁に掲げられた小説の「目次」のパネル。

「まさか、『展示の最初やけん、目次でえーわい』とか言って決めたんちゃうやろねっ?!」と顔を歪めるK子。

残りの壁は、のっぺらぼう。かと思えば、「お囲い池」や「石手寺」など、子規の句を添えた昔の松山の写真パネル六枚が賑やかしに飾られていた。

展示の中で唯一の手で触れるコーナーのすごろくやモールス信号も、三階の「明治時代の展示物」も複製品ばかり。機械仕掛けで動く「切り出し絵」は明治の文明開化の賑わいを伝えるものの、「東京」の資料が中心。松山とは関係がない展示が並ぶ。

いっそ複製品のひとつひとつに制作費を書いててくれたら違う楽しみ方ができるのに。

四階へ続くスロープが、見せ場の新聞連載一二九六回分の紙面が並ぶ壁。老眼が入ってきているK子はまた眉間にしわを寄せている。

K子よ、頼むからなにも言うな。

四階の「展示室2」では秋山家の系譜や写真、扇、盃、勲章、葉書など、遺品七〜八点ほどはホンモノだけど、あとは子規に宛てた真之の英文書簡ばかりか、司馬さんの原稿ですら、よくよく見ると複製品ばかり。

「展示室3」の展示物に関しては、真之の「鯉の滝のぼり」の掛け軸と革のトランク以外は全て複製品だった。そーだよ。茶碗を使い回すほど簡素な生活を送った秋山兄弟が、そもそも記念館に飾るほどモノを持ってるわけがないのだヨ!（たぶん）。

＝　＝　＝

余談だが、記念館の基本設計が「まちづくり推進協議会」で承認されのが、坂のぼること、じゃない、遡ること、二〇〇四年一月。

「ハコ」の設計をしてみて初めてモノが無いのに気づいたのか、二〇〇四年四月、「広報まつやま」で新連載が始まった。

題して『坂の上の雲を探そう』。

新シリーズ第一弾は、「秋山真之が子規に送った年賀状」。

小説の勢いの良さとは裏腹に、こじんまりしたお宝でスタート。

コーナーの末尾には太文字で、【※市では正岡子規や秋山兄弟、明治時代に関する資料を探しています。情報があればご連絡ください】

思えばこの頃からクモ行きは充分アヤシかった。

第二回目は「好古の将校行李」。お宝の説明に続いて、「なお秋山兄弟に関する資料は、県立歴史民族資料館、および生涯学習センターに多数展示しています」。じゃあ、記念館は何のために…？

第三回目は「ロシア兵の残したスプーンとフォーク」。

「ロシア兵」ってだけでもいいんかい!!

大丈夫か？こんなんで。案じる間もなく、『坂の上の雲を探そう』のコーナーは連載三回であっけなく終わった。

＝　＝　＝

最後は高さ二mくらいある液晶画面に「あとがき」をボーッと浮き上がらせる展示。

「こんなのフツウのパネルで読みゃいーんだよっ！」（K子）

最後までケチつけてたら、出口を間違え壁にぶち当たってしまった。私たちと同じように間違える人が多いのだろう。

「お出口はこちらです」と待ちかまえるかのように案内係が立っていた。

せめて萬翠荘の緑でも眺めようと、テラスに出ようとすると、「このテラスへは出られません」と制止される。

「なんでっ?!」

「手すりが低く、建築法上の理由で…」

「それってテラスの意味無いじゃん!!」

かみつくK子。わかってる。職員サンに罪はない。でもこれってもし

かして設計ミス?!

「ゆるやかな坂を上って、その向こうには青い空が広がって、白い雲がぽっかりと…、って、記念館もそういうイメージで造られたんだと思ってたら、ドンづまりやし、テラスにも出られんやないのっ！」（K子）

私たちはひたむきに登ってきた順路を、ただひたすら下ってミュージアムを後にした。

あんまり書くとネタバレになるので、ここはぜひみなさんにもぜひ新ミュージアムに行っていただくことをおすすめします。

できれば伊丹十三記念館とセットで見比べていただくといいのかも。故人への愛情と展示内容の密度は比例することを実感できるのではないでしょうか。

それにしても、小説の内容をなぞり複製品を並べるだけなら、気の利いた公民館や高校の文化祭でもできる。豪華な施設や設備の代わりに、模造紙に書いて壁に貼り付けたのなら、三十万円もあればいいんじゃないの？

仮に一カ所三十万円の予算を組み、市内全部の公民館と小中学校（島しょ部・北条も含め一三三カ所）で催し物をやったとしても四千万円。

記念館の維持運営などにかかる年間費用の三割程度で済む。

「坂の上の雲のまちづくり」を市民に広めるという意味でも効果があっただろう。（それはそれでうっとーしーけど）

私は「中身のないハコモノ記念館はいらない」と、市議会に請願書を出したり、「わくいわいトーク」という松山市が催す話し合いの場に友人達と参加したり、新聞の投書欄で意見を述べたり、一個人として異議を申し立てていたつもりでいた。

ミュージアム完成後、元まちづくりチームディレクターは、「坂の上の雲ミュージアムは小説『坂の上の雲』の文学館としての資料展示のほか、まちづくりの情報発信、支援の機能も持たせることになっており、世に言うハコものとは性格が違う。ミュージアムの完成でまちづくりが終わったのではなく、ここからがまちづくりの本番スタート」と、説明する。（愛媛ジャーナル07年7月号）

記念館やまちづくりが賛否あるなか、「生涯責任を負う」（04年12月市議会より）と押し切った市長は、最近では「NHKの番組終了後も、新たな松山の文化として地域に根付かせ、息長く観光客を誘致し続ける魅力として残していくのが、むしろ、本当の勝負はこれからです。しかも、その責任は市長一人のものでも市役所のものでもなく、松山市民みんなのもの」と言い出した。（愛媛ジャーナル07年7月号）

ハコモノをつくった後で、「他にも機能がある」だとか、「責任は市民みんなのもの」とか言うのは、ムダな公共事業をすすめたお役人のお約束のいいわけやんか。

※よいこのみなさんはマネをしないでください

2008-27

市バスにて

藤井玲子 文／絵

正月に大阪の市バスに乗ったときのことだった。

バスターミナルで目的地行きのバスを待っていると、停車位置を超えて目の前を通り過ぎていった。

「どないしたんやろ？」

待っている人たちは怪訝な目でバスの行方を追う。

初詣帰りらしい親子連れの男の子は大はしゃぎ。

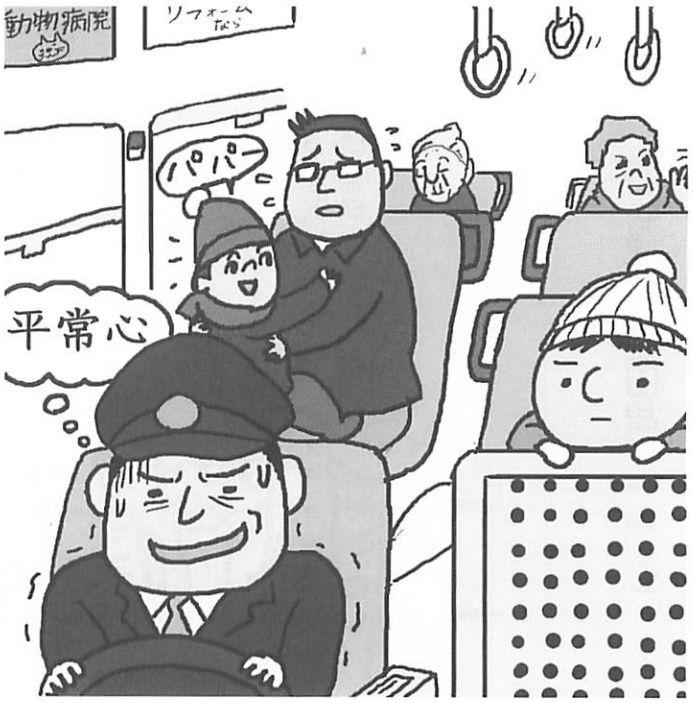
「おーい、バス、戻っておいで～！」

係員が駆けつけ、バックオーライのかけ声とともに停車位置へ戻ってきた時には、男の子の興奮はピークに。

「バス、ピッ、ピッ（笛の音）して戻ってきたで～！！」

その後、バスは何事もなかったかのように定刻通りに発車し、まもなく、運転手が車内アナウンスで説明する。

「すんません。停車位置を前のバス停と間違ってしまいました。」



心底すまなそうな、しかしどこかおどけた調子の運転手の声。

大阪の公務員に対する風当たりが強い今日この頃、それに加えて昨年からのスポーツ界や食品偽装問題での、形だけの「謝罪」にウンザリしていたところだ。「正月早々、どうなってるんだ！！」という厳しい空気がバスの中に広がる。

するとどこからともなく、

「正直でええがな。なぁ！」

と、おばちゃんの声。連鎖反応のように

「ホンマや。気持ちええワ」

「ウソつくよりえーわ」

重苦しい空気をうち破るおばちゃん達の意表を突く言葉に、クスッと笑いがもれ、バスの中はたちまち和やかに。

そーなんだよな。この場合、個人的なミスだし、ちゃんと謝ったんだし、事故も起きてない。

個人のミスとして許されること、組織の体質として問題にすべきところを、混同してはイカンよな。

おばちゃん達のとっさの一言が運転手さんを窮地から救った。運転手さん、さぞやありがたかったにちがいない。

ここまでならよくある（？）「心温まるいいお話」だが、現実は甘くない。

ほっこりしたバスの中を、先ほどの男の子の無邪気な声が引き裂いた。

「ねぇ、なんでバス、戻ってきたん？」

膝に乗せていた若いお父さんの表情がひきつる。バスの中が一瞬静まる。お父さんは落ち着いて、

「うっかり間違えちゃったんだって」と優しく答える。

「ねぇ、なんで間違えたん？なんでうっかりしてたん？ねぇ～なんで、なんでぇー！！」

原因究明に容赦ない坊や。ちょっとイラつくパパ。

おばちゃん達がもたらしたほっこりムードは今はいずこ。坊やの執拗な追求に、パパよりも運転手さんがキレてバスが暴走せんやろか、と、車中は再び緊張感に包まれた。

坊やの暴走は止まらない。

「なぁ、なんで、バックオーライして戻ってきたん？なんでピッピッ、して戻ってきたん？」

バスが発車して早、十五分。ガキ、いや、好奇心旺盛なお子様の健全な反応とはいえ、しつこすぎ‼

バス乗客の坊やに向ける視線はまさに、「ＫＹ」、空気読め。

「ほら橋を渡るよ」「あ、パトカーやで」と気を逸らすのに必死だったお父さんもさすがに音を上げた。

「えーかげんにせーよォ・・・。誰だって間違うことくらいあるやんか～。」

昨年末、「ＫＹ」＝空気読めない、というのが流行語になった。空気を読めないのは困ったヤツだと思っていたけど、坊やのしつこさ、空気の読めなさ。なんかこんな人、他にもおったなぁー、と思いきや、それって、なにかにつけて「サカクモ」を持ち出しては、「なんでハコモノ建てるん？」「なんぼかかるん？」とネチネチ文句をたれる私やんかっ‼

わかってるよ。私が口を開けば「また『サカクモ』かよ」って、周りのみんなもウンザリしてるってコトも。

が、しかーし。運転手さんの停車ミスと違って、行政のムダ遣いは、「間違うことあるやんか～」では済まされない。

本来物静かで従順な私が、あえて空気に逆らい、ホントはいやいやながらモノ申しているのでございます。

か細い神経をすり減らし「おかしいよ！」とやっとの思いで声を上げたら、

「ある種の政治的思惑を背景

ひめ歯科クリニック
井上知則
〒七九一―八〇二三 松山市姫原二―六―一一
TEL ○八九―九二四―○八八八

医療法人
関谷栄歯科
歯学博士・歯周病専門医
理事長　関谷　栄
〒791-8013　松山市富久町四二二-一〇
TEL・FAX　〇八九-九六五-二三八八

に、まちづくりに異論を唱える方がおられます」（愛媛ジャーナル2005年9月号）と市長に書かれる始末。

まして地元でずっと声を上げ続けようものなら、

「わからなくもないが、そこまで言わんでも」

「あの人は過激な人やけん」

なーんて、「空気読め」みたく言われちゃうんだろーなー・・・。はぁ～。

うるさ方あっての「街の活性化」。バスの中のおばちゃんみたいな「いっちょかみ」（なんでも首をつっこみたがる人）や、坊やのようなしつこい、じゃなくて、ねばり強く声を上げ続ける人たちには、「空気読め！」などとおっしゃらず、「よう言うた！」と、おもしろがっていただけないでしょうか。

☆

さて、訂正とお詫びなのですが…

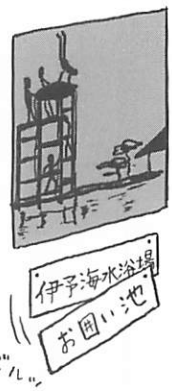
前回のぼあん（二〇〇七・秋号）「詳解？！サカクモミュージアム」で、展示物について、「お囲い池や石手寺など（中略）写真パネルが賑やかしに飾られていた」、「遺品七～八点はホンモノだけど、（中略）あとはよくよく見ると複製品ばかり」と記しました。

二〇〇八年一月十四日付け愛媛新聞記事によると、ポスターや入場券などに使われている「お囲い池」の写真が「伊予海水浴場」であると指摘され、「別場所」である可能性が出てきました。

写真を所蔵する子規博は「間違った情報を提供する危険性がある」と判断し、写真の絵はがきを撤去。一方、坂の上の雲ミュージアムは、「経費の問題もあって（図録など写真の差し替えなど）、間違いだと確定できない限り使用せざるを得ない」と、写真の使用を継続しています。（二〇〇八年一月現在）

指摘に対する子規博と同ミュージアムの対応は正反対であるものの、写真は「小説に登場し、子規や秋山兄弟の基盤となった松山藩の歴史にも関係する場所」として、「坂の上の雲のまちづくり」でシンボル的に使われているものです。

わたくしといたしましては、展示品が複製品であることばかりに気を取られ、ポスターやチケットなど、よりにもよって一番目立つ「写真の真偽」について、十分な確認を怠り、「偽装表示」の可能性を追求できなかったことを、読者の皆様にこの場をお借りして深くおわび申し上げます。



2008-28

キョーコさん

藤井玲子 文／絵

「ちょっと待って！それってどーゆーこと？！」

松山に暮らしていて、こんな風に、突然オバサンにからまれた経験はございませんか？

もしかしたら私の友人かもしれない。その名はキョーコ。今年で六十歳になったにもかかわらず、その遠慮無い「ダメ出し」、いや、毅然とした振る舞いは、言いたいことの半分も言えない引っ込み思案な私にはうらやましい限りだ。

「英国（イングランド）風ホテル」（名前は伏せときます）ができた際、キョーコさんがリエちゃんと連れだって「視察」に行ったときのことだ。

「クリームティください」とキョーコさん。

ちなみに『クリームティ』とは、紅茶とスコーンにクロテッドクリームを添えたもの。イギリスではポピュラーなメニューだそうだ。

仰々しく構えたボーイの表情が固まった。

「は、はい。少々お待ちください」と足早に立ち去る。

しばらくして戻ってきて、

「あの、お客様、クリームティ、とはどのようなものでしょうか」

「あのね、かりにも『英国』を名乗るならクリームティくらい勉強しておきなさい！」

ああ、鬼の首を取ったようなキョーコの表情が目に浮かぶ・・・。

ま、確かにあそこは、勿体ぶってるワリに、お花などを飾る入り口のスツールに、なぜかスコッチ（！）が対で飾ってあったり、ミルクティがダージリンみたいにシャバシャバだったり。中身にウルサイ人にとってはキビシイ意見が多かった。

だけど、『クリームティ』は難易度高いよ。ボーイさん、お気の毒様。

こんなこともあった。キョーコさんが某書店へ新訳版の「カラマーゾフの兄弟」を買い求めに行ったときのことだ。

「カラマーゾフの兄弟、どこにありますか？」とキョーコさん。

「は？どの兄弟ですか？」と店員。

「まったく信じられないよ。あの大きな書店でこれだよ。書評とか読んでないのかね。どの兄弟？って、まさか亀田とか秋山とかしか思い浮かばんかったやないやろね！」

「無知を恥じるな」なんて優しい言葉、彼女の口から聞いたためしがない。

「『知らない』なんて口に出せるのが信じられない。知らないなら勉強しなさい！」が口癖だ。

「あまりに日常的だったから数え切れない」キョーコの「ダメ出し伝説」。

友達が贈ってくれた五〇〇〇円のバレンタインチョコに「高い！」と怒り、せっかくのお気に入りバッグに「日本人ってこーゆーブランドのロゴがはいったの好きだよねぇ」とイヤミを言い、私の知り合いの家でウエッジウッドのカップ&ソーサーで紅茶を出してもらったときなんかは、「こんなのが好きなんだー」なんて、冷めた目でカップを見つめ・・・。

若い人が近所に開いた蕎麦屋にはめんつゆの味にまで口を出したようだ。そのクセちゃっかり自分の陶芸教室に誘ってるんだから。

二〇〇三年十二月と二〇〇八年一月、がんセンターに入院したときも文句、いや抗議の声をあげつづけた。

「アイスノンが固い。今どきこんなの置くな」（たしかに旧式のカチカチのやつで、置いてる数も少なかった）

それまでは請求されなかったのに、独立行政法人になって請求されるようになった手術後の「差額ベッド代」（一日あたり約二万円）にも、「こんな高いの、どれだけの人が払えるんだ！」。

「国立の時はやかんでお茶を病室まで運んでくれたのに、法人になってからはナースステーション近くまで、自分でもらいに行かんといかん。こっちは病人やっちゅーねん！」

病院の売店のコンビニおにぎりに対しても、

「添加物ががんによくないとわかっていて、なぜ添加物ばかりのものを置く！！」

冷凍ギョーザ事件の翌日の昼食が「餃子」だった時には、さすがにげんなりした顔で、

「これってどう思う？」

お見舞いに行ったわたしは

「口が達者でなによりだね」

と返すのが精一杯だった。

育児休暇の取得を迷ったナオちゃんがキョーコさんに相談すると

「みんなが取らないから、っていうのはおかしいよ。制度があるんだから取りなさい。ナオちゃんがやらなきゃ変わらない。後に続く人のためにもがんばれ」と背中を押し、励ました。

二人目の子供が生まれたときは、「よくやった！」と自分のことのように喜び、

「で、ダンナも当然、育休取るんでしょ？」と釘を刺すのも忘れない。

「みんながするから」とか、「みんながやらないから」と調子を合わせるのを嫌い、「まぁまぁ」とその場をおさめようとすると、「ちょっと待ってよッ！」と遮り、納得するまで「ねぇ、どうして？」と声を上げた。

不満があると「なんなんよッ！」

うっかりグチれば、

「文句があるなら声あげろ！」

「だから日本人はダメなんだよ」となにかにつけて言うクセに、陶芸の勉強のためイギリス

に留学中、難しい釉薬の調合にキョーコさんだけが一発で成功したときは、驚くイギリス人を尻目に、
「日本人をナメるなよ！」と思ったそうだ。
愛媛を出たくてしようがなかった、と言ってたクセに、
「私の原風景は新居浜から見た石鎚の山並みなんだよねぇ」
まったくどっちなんだよッ‼

外に向かって開きっぱなしのキョーコさんの口は、身内に対してもとことんオープンだ。
日本では「門外不出」「一子相伝」みたいな釉薬の調合も、学んだことは勿体ぶるどころか、むしろ誇らしげに教える。
「試作品」といって気前よくくれる器は、いつも一番できのいいやつだし。
技術でも知識でもなんでも、自分の一番のお気に入りを差し出すのに惜しみない。
私とキョーコさんは喋りだしたらもう止まらない。

「アンタらホンマ、よう喋るな」
とあきれられても、
「喋ってろ、って言われたら一晩中でも全然平気。むしろ喋るな、って言われる方がゴーモン！」と言って笑いあった。

そんなキョーコさんが、一言喋るのも体に負担がかかり、命を削る状態になってしまった。
だけどマスコミの世界に身を置いたキョーコさんらしく、病院のベッドの上でも自分の経験、それが病気であっても、人に伝え、記録する事を強く希望した。

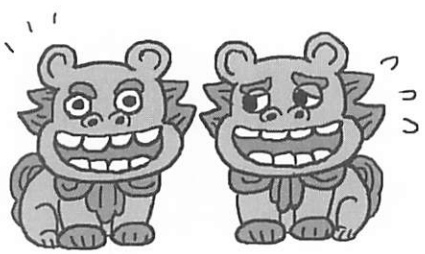
キョーコさんは、なにを望み、なにを伝えたいのだろうか。
口が開けないキョーコさんをめぐって、彼女の「闘い」を支えたいと思う私は、「おだやかに過ごさせてやりたい」と願う人たちと微妙に意見が食い違った。
わかり合ってると思っていただけに、このちょっとした「差」を埋められないことがもどかしかった。
そしてはじめて、みんながそれぞれの価値観や考え方で彼女を見守っていることがわかった。
キョーコさんがみんなをそのまま受け入れた結果だね。
みんな違ってていいんだよね？

「来る者は拒まず」の彼女の口癖どおり、年齢も性別も仕事も悩みもバラバラの人たちが、そのままの自分で自由になれるキョーコさんの西一万の木造家に引き寄せられた。
キョーコさんのつくった大きなマグカップでコーヒーをすすっていると、ガラガラガラッ、と引き戸を開け、今日も誰かやってくる。
キョーコさんのお陰で、私はたぶん出会うことの無かった人と出会うことが出来た。

感謝するくらいならもっと自分の世界を広げなさい、って？

レイコちゃんは人の話をよく聞かず思いこみで決めつける、って？
ハイハイ、相変わらずおキビシイですな。キョーコさんに言われなくたって、自分が一番わかってますヨだ。
わたしはたぶんこれからもずっとこうやってキョーコさんにダメ出しされて生きていくんだろうな。そしてこれからは心の中のキョーコさんに相談するしかないんだね。
キョーコさん、私まだ、しゃべり足りないよ。

思ったことは
口に出せ！！



2009-29

ワーク・シェア！

博士とワーク・シェアリング

藤井玲子　文／絵

アルバイト先の同僚「ウサ子」（気が弱くウサギの心臓：自称）は私と同い年の「天然」チャンだ。

大学院まで出ていながら、サッサと結婚した彼女にとって、私は「社会人経験がある」というだけでリスペクトの対象だ。

外人から電話がかかってきて、英語でなんとか受け答えてると、

「フジイたん、やっぱすごいよォ～」と感嘆の声を上げる。

（しかしウサ子はロシア語ペラペラである。使う機会が少ないだけで、そっちの方がスゴイと思うが）。

見た目は「セサミ・ストリート」の細い方と太い方（言うまでもなく、私が後者）のデコボココンビだが、20年前に同じコンサートを見に行ってたり、去年は正月に同時にお腹をこわしたり、その前は同時にV6の岡田クンの夢を見たり・・・。周りが気持ち悪がるほど、しょーもない行動が奇妙にカブる。

そんなウサ子が、ある時神妙な顔で耳打ちしてきた。

「ねえ、フジイたん。『ワーク・シェアリング』ってどう思う？」

ええっ？なに唐突に！

「だってサ、『派遣切り』っていうの、はやってるんでしょ？オレたち不安定なアルバイトじゃん。こんな不景気じゃ、いつ首切られるかわかんないよ。だからさ、フジイたんとお仕事半分っこできないかなーと思って。」

「ばかたれ。こんな安い時給でどーやって『半分っこ』やねん！」

「ひぇ～、さすがフジイたん！スルドすぎッ！！」

『ワーク・シェアリング』とは聞こえがいいが、分け合う相手によるわな。

日頃、成果主義だとか、過度に競争をあおる風潮に否定的な夫にその話をすると、「アンタらの話聞いてると、やっぱある程度、競争は必要かなー、って思えてくる」。ええ〜っ！！

90年代半ば。商社のOLだった頃、「リストラ」の大号令のもと、大量に離職者をだし、業績回復をはかった時期があった。

あの時私は、ビクビクしながら男性の先輩にたずねた。

「私もリストラされますかね？」

今思えば先だってのウサ子の姿そのものだ。

先輩はキッパリと断言した。

「オマエはならへん。給料安いからな。」

ラッキー！・・・って、喜んでる場合じゃないか。

さらに先輩の言葉が続く。

「だから給料の安いモンが時間のかかるしょーもない仕事をしたり、残業をたくさんするのは当たり前じゃ！」

いくら腰掛け気分（のつもりだった）のお気楽OLとはいえ、コイツに「コストの安い人間」としての自覚をさせられようとは！

しかも裏っ返せば、「パフォーマンス性の高い仕事はオレ達エリートがいたします」ってコトだよね。鼻持ちならなさにカチン！ときた。

そんな個人的でヒクツな経験があるから、『ワーク・シェア』という言葉が再び注目されるようになっても、専門性の高い仕事を求められそうにない我が身には、条件が悪くなりそうなばかりで、いまひとつありがたみがわからない。

「努力する人が報われる社会」にこしたことはないけど、どの程度の仕事をしたら「努力」と認められ、誰がどういう形で「報い」てくれるのだろう。

まさかノーベル賞とかメジャーリーグとかオリンピックレベルの結果を出したら国家が生活保障します、ってワケじゃないよね。

体が元気なうちはボチボチがんばりますんで、できれば「ワーク」よりも「待遇」や「保障」など、「分配」のシェア（共有）も考えていただけたら、と。

堀本歯科医院
堀本真二
〒七九九―二四三四 松山市柳原三三一一
TEL 〇八九―九九三―一四七四

2009-30

消えた年金！！

藤井玲子　文／絵

「ちょっとお父さんの記録を見てほしいんやけど」。

そう実家の母にたずねられたのは、二〇〇七年の十二月。「消えた年金」五〇〇〇万件の「名寄せ」のために送られてきた「ねんきん特別便」がコトの始まりだった。

「お父さん、昭和三十年入社やねんけど」と母。加入記録は「昭和三十一年」からとなっており、なるほど一年足りない。（図①）

研修期間や契約社員だったわけでもないという。亡くなった父にいまさら確かめようもない。

母の遺族年金に果たしてどれほど反映されるのかわからないが、年明け（二〇〇八年）早速、実家の近くの社会保険事務所へ出向く。すると、お年寄りばかり、座るところもないほど混み合っている。

四時以上待たされ、ようやく順番が巡ってきた。

念のために持参した会社の所在地（名古屋）のメモを見せ、加入期間不足を職員に説明して、記録を探してもらうことに。

半年後の〇八年七月、ようやく「回答表」が届いた。

やれやれようやく解決か～、と、あらためて見ると・・・。

んん?! 三ヶ月の「空白期間」があるではないの!?（図②）

すぐに回答表を持って再び社会保険事務所へ。あ～、めんどくせー・・・。

「三ヶ月間だけ会社を辞めるはずがない。記録がないのは明らかに不合理」と職員に言っても、

「こちらとしては、年金を納めた、という記録がないと認められません」の一点張り。

お・ま・えがその記録を無くしたんやろが～ッ!! アタマに血が逆流するのを鎮めようと、ふと隣を見ると、同じように「消えた年金」の照会に来ているおじさんがいた。

「いったいいつになったらわか

図①

ねんきん特別便　年金記録のお知らせ　・作成年月日　平成19年12月11日

②番号	③加入制度	④お勤め先の名称または共済組合名等	⑤資格取得年月日	⑥資格喪失年月日	⑦加入月数
1	厚年	●●産業（株）大阪支店	昭和31. 7.20	昭和40. 5. 1	106
2	厚年	●●産業　株式会社	昭和40. 5. 1	昭和46.10. 1	77

図②

被保険者記録照会回答票　⑬平成 20 年 7 月 29 日現在の加入記録です。

加入制度	① お勤め先の名称又は共済組合名等	② 資格取得年月日	③ 資格喪失年月日	④加入月数
厚年	●● 産業（株）	昭和 30. 4. 1	昭和 31. 4.10	12
厚年	●● 産業（株）大阪支店	昭和 31. 7.20	昭和 40. 5. 1	106
厚年	●● 産業　株式会社	昭和 40. 5. 1	昭和 46.10. 1	77

医療法人
関谷栄歯科
歯学博士・歯周病専門医
理事長　関谷　栄
〒七九一―八〇二二　松山市富久町四二二―一〇
TEL・FAX〇八九―九六五―二三八八

るねん」とオジサン。

「はぁ、たいへん混み合っておりまして、お時間をいただいております」若い男性職員が答える。

「そんなんワシが死んでもたらどないすんねん？」

「その場合はご遺族が・・・」

・・・ってそーゆーモンダイちゃうやろ?! 隣からあやうくツッコミそうになってしまった。

「じゃあ、このままわからんかったら、どないすんねん？」

あきらめ混じりに皮肉を言うオジサン。

「その場合は仕方ないと申しますか・・・」

ちょっと！ それって、泣き寝入りしろってコト?! ガマンできなくなり、

「オジサン！ こうなったら解決するまでなにがなんでも長生きしたろなっ!!」と身を乗り出してオジサンの肩を揺さぶった。

もうこうなったらお金の問題ではない。（お金も大事だけど）

泣き寝入りはむこうの思うツボだ！

それにしても、なんとか他に心当たりはないものか。ふと、会社の本社機能が「名古屋」から「東京」に移転した、と母の言葉を思い出した。

すると職員は最初から言えよ、と言わんばかりに、

「え？ 東京にもいらしたんですか？じゃあそちらも調べないと」。

こっちだって窓口別に調べてるとは知らず（厚生年金は各都道府県社会保険事務所で事業所からの届書を受付）、てか、いちいち言われなくても全部いっぺんに調べてこいっ～!!

腹立ちついでに第三者委員会に申し立てするための「回答書」（記録がなかった、という社保庁の証明書）作成を申請した。

半年後の二〇〇九年二月。

「申出期間の記録は見あたりませんでした」と、どことなく「上から目線」の文言が添えられた「回答書」が送られてきた。

この「回答書」、つまり「記録がないという証明書」（ヘンなの！）を添付して第3者委員会に申し立てよ、というのだ。

ちなみに第三者委員会（総務省）に申し立てしてたとしても、給与明細など「明らかな証拠がある場合」と認定条件は厳しく、救済も三十五％程度と低い。

また運良く（！）認定されたとしても、その後、厚労省での手続き待ち、支払いとなるといつになるかわからない。

「年金を納めた明細も無く、第三者委員会でも認められなかったら？」と「ねんきんダイヤル」に問い合わすも、

「その場合はあきらめていただくというか・・・。」と、ここでも「泣き寝入り」のススメ。訴えるにも誰を訴えたらいいのやら。

どうせ国（社保庁）にも社会保険事務所にも記録がないのなら、探すだけ時間とお金と労力のムダ。

野村修也著「年金被害者を救え」（岩波書店）にもあるが、「年金記録の修復」という「統合作業」ではなく、「本人による記録確認」にウエイトを置いて期間を決めて救済することが、一番実害が少ないのではと私も思う。

それにしても「消えた年金」を

めぐって、図らずも父のサラリーマン人生を振り返ることとなった。

おっ！そうだ！父の会社の総務部に問い合わせてみよう！ひょっとしたら同じような人がいるかも・・・！

昭和五十五年に退社した時の古い住所録にある番号にかけてみる。

・・・が、つながらない。

ネットで検索すると、二〇〇二年に会社が清算されていたことがわかった。

「人生いろいろ、会社もいろいろ、社員もいろいろ」と言ったのは、厚生年金に不正加入していた小泉首相（当時）だが、

ウチの場合、「年金もいろいろ、会社もいろいろ」・・・。はぁ～あ、まったくシャレになんないよ。

二〇一〇年には「日本年金機構」が設立する。「公的年金にかかる財政責任・管理責任は引き続き国になる」らしいけど、これまで政治家も職員も官僚も誰も謝罪してないのに、「民営化」でますます責任の所在がわからなくなりそう。

これまで年金記録問題を提起してきた民主党が政権を担うことになった。

二〇〇八年三月三十一日までに消えた年金をすべて修復します」「最後のお一人までしっかりとお支払いします」と公約した安倍晋三元首相や、「責任力」を掲げた麻生太郎前首相らには今後は野党の一議員として、与党の公約を厳しく守らせ、この機会にぜひとも自らの発言を実践して頂きたい。

年金記録は消えても私の記憶からは消されへんで～！

堀本歯科医院
堀本真二
〒七九九―二四三四 松山市柳原三三二一
TEL 〇八九―九九三―一四七四

2010-31

婚活!!

藤井玲子 文／絵

十年前、介護保険制度が始まったばかりの頃、ヘルパー2級の資格を取るため、大阪市大正区で開かれる講習会に通っていた。

わたしより一回り、あるいは二回りも「センパイ」の大阪のオバチャン達と授業や実習の合間をぬって「沖縄ソバ」を食べに行ったり、「家族参加」の飲み会や、なぜかプールへも一緒に行ったり…。まさに「同じ釜のメシ」を食べ、「ハダカのつきあい」(?)をした。

そして講習会が終わる頃には、主催者も首をかしげるほどの濃ゆ～い関係が、受講者の間に築かれていた。

その後、年賀状のやりとりが続いていたのだが、声をかけ合い、久しぶりに集まることになった。

「十年ぶりの再会」では、多少の「経年劣化」はお互い様とばかり、「変わらないね～」と誉め讃え合った。

しかし横川サンの様子だけは違っていた。

当時、お姑さんの介護と家事をこなしながら受講していた横川サンは、正直、実年齢よりかなりフケていた。

その後お姑さんを見送り、数年前にはお連れ合いもなくされたと聞いていた。なんと声をかけたらいいものか…。

しかしわたしの戸惑いなど瞬時に吹き飛んだ。

黒く染め上げた髪の毛に、レモンイエローのスプリングコート、お花のモチーフのスカーフ。なにより足取りが颯爽としている。

「横川サン、若くなったねェ～!!」

すると日頃から横川サンとつきあいのあるオバチャン達が

「そおや～!だってこの人、『花の未亡人』やもん～!!」

と、身をくねらせる。

マジメな横川サンまで

「婚活中やねん。」と笑っている。

(→目は本気だった)

その様子を見ていたシングルマザーのユウコちゃん。

「え～な～、私も誰かえー人おったら紹介して～」

すると今までさんざん好き勝手喋っていたオバチャン達が一斉に振り返り、

「アカン!絶対やめときッ!」

「え～、なんでェ～?」

思いがけないオバチャン達のリアクションに納得がいかないユウコちゃん。

「そーですよ。えー人やったらいいんじゃないですか?」と私。

すると一番年長の板戸サンがヌッとわたし達に顔を近づけ、

「いまから再婚しても、相手の病気の心配やら介護やら、向こうの家族関係やら、ややこしい問題を抱え込むだけや!」

低い声で囁く姿は予言者のよう。まわりのオバチャンも深く頷く。

凍り付いた私たちを見て、さすがに言い過ぎたと思ったのか、板戸さんはビールを一口。

「せやけど、ワタシらみたいにうーんとトシとってからか、よーっぽどお金持ちやったら別やで」。ニヤリと付け加えた。

地域とのつながりが薄れ、さらに核家族化や長引く不況など、従来通りの社会保障のあり方が立ちゆかなくなった昨今。

「家族」を「一番身近なセーフティネット」ととらえ直しても良いのではないか、『婚活ブーム』もそんな背景があるんじゃないだろうか…などと考えていた私。

オバチャン達の「リアリズム」には、優等生の模範解答など寄せ付けぬスゴ味があった。

さらに話題は「子ども手当」に。

「あんなん所得制限もうけるべきや！」

「給食費も払わへん親に渡しても、パチンコ代に消えるだけや！」

全世帯給付にした方が効果が上がる、という統計学上のハナシや、なによりこれからの公教育のあり方という理念のハナシなど、ここでは無力に等しく、わたしは、

「教員を増やすとか、給食費をタダにするとか、いっそ還付税にしてくれたらえーのにね」と、口を挟むのがやっとだった。

大阪のオバチャン達のように、生活実感の伴う言葉や行動力を見習いたいと思う。

だけどその一方で、世知辛い「現実」を少しでも「理想」に近づけていけないものか…近頃どんどん「現実的」になっていくオバマさんやハトヤマさん達を見ていて思う。

かつてお見合いを二十回近く繰り返した私としては、「理想」が「現実」に近づいていくのは、「婚活」だけで充分だと思っている。

※注　この原稿を書き終えた二ヶ月後、「友愛」の高い理想を掲げたハトヤマ首相は基地問題で辞任。ハア・・・。

堀本歯科医院

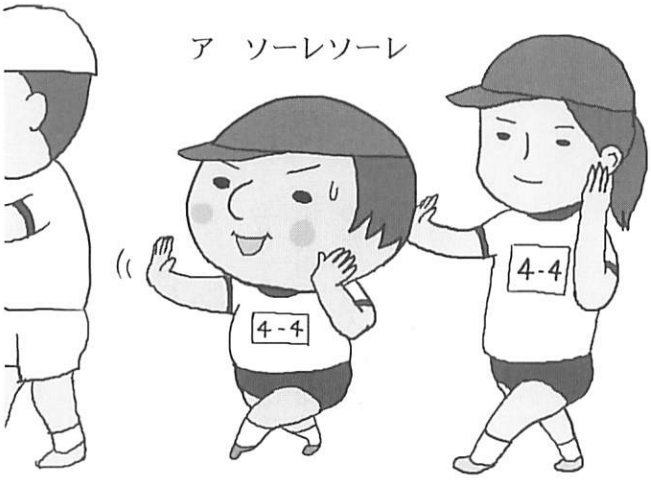
堀本真二

〒七九九―二四三四　松山市柳原三三二一

TEL　〇八九―九九三―一四七四

ゲゲゲ！の管理教育

♪ふるさとよいとこ
若いまちィ～



藤井玲子
文／絵

小学校時代を千葉県の郊外で過ごした。

ニュータウンにできた学校は、よそ者がほとんど。歴史はないけどしがらみもなく、居心地は悪くなかった。

育ちの良さがたたって（？）体の弱かった私は、脳性まひの後遺症のあるツルヒコ君と、「いきもの係」としてインコやウサギやニワトリの世話し（…というか、ほとんど彼にやらせ）、目立たず、まったり、小学生ライフを送っていた。

転機は突然訪れる。

四年生の春、新しい校長先生がやってきた。

「わたスは、この、ヌシ（西）小学校にチて（来て）…」。

ズーズー弁まる出しの小柄な新校長に、私たちはすっかり気を許してしまった。

（やられた～っ!!）と思ったのは、それからしばらくして。

教育関係者のハナシによると、私の暮らした千葉県という所は、愛知、愛媛と並ぶ、「管理教育」の地として有名なのだそうだ。

とりわけ七十～八十年代、文部省（当時）が経済界の要請を受けて「従順で均一な労働者」育成を目指した影響か、それとも新しい校長センセイの「趣味」（主義？）なのか、どんなオトナの事情があったのかわからないけど、学校の雰囲気は変わってしまった。

その年の運動会では、「マス・ゲーム」の動きが全員、ビシッ！と揃うまで、何度もやりなおしさせられた。

市制十周年記念とやらで新しく作られた「ふるさと音頭」も、振り付けをしっかり覚えさせられ、その完成度たるやどこかの社会主義国のよう。

運動会だけでない。

毎朝校庭を二～三キロ走らされ、廊下は「行進」で右側通行。

休み時間は「業間体育」として、ドッジボールやサッカーなど、運動中心となった。

動物の世話どころではなくなり、ツルヒコ君とは疎遠になっていった。

授業中は大きな声で発言しなくてはならず、シャイ・ガールの私にとって（ホントだって！）ストレスで声が出なくなるほどの苦痛だった。

「給食」は「三角食べ」といって、「主食」→「おかず」→「牛乳」と、食べる順序まで決められ、唯一の息抜きの時間もいよいよままならなくなってきた。

掃除は一日二回。毎日クレンザーで壁や床や窓を磨き上げた。（三十年後、たまたま開いた小学校のホームページで、「アスベスト検査結果について」という、不吉な文字を見つけることになろうとは…。）

そして長い一日の終わりには、「反省会」と称する「総括」、もとい、ホームルームが待っていた。

「○○クンは、掃除の時間にふざけていました！」と誰かが「糾弾」すれば、

「今度からはみんなと協力して全力を出します！」と、「自己批判」。（「軍国」も「反権力」も「極端」になると似てくるようだ。）

不満を表わそうにも、「不言実行！」と担任がのたまえば、モンクを言う気分もどこかへ失せた。

日々の「教練」に疲れ切って帰ってくる私に母は、

「軍隊みたいだね」と冗談ともつかない調子で言った。

そんな時、本屋で偶然手に取ったのが、水木しげるさんの「ほんまにオレはアホやろか」（ポプラ社／一九七八）だった。

水木サンの落第人生から戦争体験、戦後手がけた怪しげな商売…。ミもフタもないタイトルのこの本を、十歳の私は光明を見つけた思いで夢中になって読んだ。

そして、「よく寝てよく食べる」こと以外、「才能」や「体験」、「おおらかさ」はもちろん、「落第生ぶり」においても「師」の足元に及ばない中途半端さを嘆きつつも、

「アホでもなんとかやっていけそうだ！」。

「軍国化」した学校になじみ切れない自分を水木サンに重ね、ミョーな自信をつけた。（↑ここが「師匠」仕込み!?）

もしあの頃出会っていたのが、「水木サン」でなく、「竜馬がゆく」や「坂の上の雲」だったら、私も違う人生を送っていたかもしれない。（そりゃないか。）

とゆーか、実際、松山市では授業で「サカクモミュージアム」や「秋山兄弟生誕地」の見学に出かけたり、教育長がＮＨＫのドラマを見るよう「通達」まで出したという。

だけど、教育現場でオトナの事情や好みを一方的に押しつけることが、子ども達にどんな影響（メーワク）を与えるか、もうちょっと考えてみてもいいんじゃない？と思う。

どれほどの教育効果（逆効果も含め）があったか、私を見りゃわかるでしょっ!?

堀本歯科医院
堀本真二
〒七九九―二四三四 松山市柳原三三二
TEL 〇八九―九九三―一四七四

東北震災…

藤井玲子　文／絵

一瞬なにかの間違いかと思った。

久しぶりに民放のチャンネルに切り替えると、「山瀬まみ」が腹を抱えて笑っている。新聞の番組欄を確かめると「新婚さんいらっしゃい」。

東北関東大震災から八日目、三月十九日の土曜日。

いまだ孤立し救助を待つ人たちや、避難所に入っても救援物資が届かず困窮を強いられている様子がくりかえし報じられていた。

そして地震や津波に追い打ちをかけた原発事故は、炉心の一部溶融や水素爆発などを次々と引き起こし、制御不能状態。高放射能量のもと、十七日から陸自のヘリや東京消防庁の特殊車両が放水作業に加わったものの効果ははっきりせず、電源復旧が頼みの綱。

各国大使館は関西に事務機能を移転したり、米国も同国人に向けて原発から八〇キロ圏外へ避難勧告を出すなど、緊張感はピークに達していた。

予断を許さない、というか、素人目にも事態が悪くなっているとしか思えない状況に、被災地から遠く暮らす私でさえ、いよいよ今までの生活が成り立たなくなる…とこれから長く続く絶望を予感した。

そんな最中の「新婚さん…」は、いきなり「非常時」から「日常」へ引き戻されたみたいで唐突さに戸惑った。

同十九日、ＮＨＫ総合は朝ドラの「てっぱん」を再開。

「地震関連」の特別番組一色だったのが、一週間ほどで喪明けのごとく「日常」に戻っていった。

一九九五年一月、神戸の実家で阪神淡路大震災にあった。

小さな余震だけでなく、「震」という字づらや、「シンサイ」という語感にまで反応するようになっていた。

そんな時、ＮＨＫの朝ドラの主題歌「春よ、来い」を耳にしたときは、普段朝ドラを見ない私にも「日常」の安心感を思い出させて

くれた。
そして命があっただけまし、家が残っただけまし、怪我がなかっただけまし…よそと比べることで気持ちの折り合いをつけた。
避難所が解消された半年後の夏に「終息宣言」が出されたときは、心底ホッとした。

いつまで続くかわからない緊張の中にいる人が、「日常」を感じて安心したり、なるべく希望的に情報を解釈したり、「〇〇よりまし」だとか「もう、大丈夫」と誰かに言ってもらいたい気持ちはよくわかる。
さらにそこへもってきて、原発事故に対してネガティブな情報を流す個人やメディアに対し、「不安を煽るな」と批判する人もいる。

だけど「想定外」の原発事故は、被害の拡大や長期化など、今後どんな困難が待ち受けているかも「想定外」だ。（もちろん事態が収束することを願っている）
いつまでも浮き足立っているわけにはいかないけど、テレビ番組のように、気持ちまで「日常」に切り替えてしまっていいのだろうか。「日常」の枠組みに収めて、危機を軽く見てしまってないか、慣れっこになってないか、別の不安がよぎる。

震災から三週間。「経済活動の低迷」を懸念し、「自粛の自粛」を要請する声が出はじめた。
「原発を今すぐ止めるのは現実的でない」という「現実的」な意見も根強くある。
とはいえ、地方や「協力会社」にお金で担わせる原発行政のしくみに見て見ぬふりをし、電気の恩恵を受けてきたわたしも、「現実的」な一人として負うものがある。
そのうしろめたさから、震災から二十日間ほどの出来事を書き残しておく。
どれほど多くの人が、この「人災」に恐怖し、犠牲を払ったか。そしてどんな未来を選んだのか。忘れないよう、自戒を込めて。

●3月15日、厚生労働省と経済産業省は福島第1原発で緊急作業にあたる作業員の被爆線量の上限を、計100ミリシーベルトから250ミリシーベルトに引き上げる。
●21日、ウィーンのIAEA本部でひらかれた緊急理事会で、天野事務局長は冒頭演説で福島の原発の状況は依然深刻としながらも「改善の兆しが見え始めている」と述べ、「原子力はクリーンで安全なエネルギーとして今後も重要な選択肢としてあり続けるだろう」。
●21日、福島・群馬・栃木・茨城のホウレンソウや牛乳などから規制値を超える放射性物質が検出。出荷を停止指示。
●23日、東京都の浄水場からヨウ素検出。乳児に飲料控えるよう呼びかけ。
●26，27両日に共同通信社が実施した世論調査。
今後の原発のあり方について。
「減らしていくべきだ」「直ちに廃止」の合計が46・7％。
「増設」「現状維持」の合計が46・5％。
●28日、関西電力八木誠社長。「原子力発電はエネルギーの安定供給や地球温暖化対策の切り札だ」「原発の安全安定運転をきちっとしていくなかで、原子力の比率も高めていく。これが基調路線だ」
●28日、中国電力山下隆社長。「安全・安心を最優先にしながら進めたい」と島根原発2号機のプルサーマル計画など、原発事業を引き続き推進する考えを示す。
●1～4号機近くの放水口付近で30日採取した海水から法令で定める濃度限度の4385倍のヨウ素131が検出される。
●31日サルコジ仏大統領、首相官邸で会談。「原子力を選ぶかどうかではない。安全性を高めるためにどうしたらいいか議論の方が有効だ」。原発推進の基本政策を強調。
●3月17日の記者会見で「現状では原発を推進していくことは難しい状況」と方針転換を語った谷垣自民党総裁に対し、原発を地元に抱える議員らから「原発を否定するのか」と批判され、1週間後には「安定的な電力供給ができないと製造業などが維持できるのかという問題もある」と軌道修正。

2012-34

ゲンパツとサカクモ

藤井玲子
文／絵

まだやるんかいっ！？思わずツッコんだのは私だけではないだろう。

前回の「ぽあん」では、福島の原発事故にどれほど多くの人が苦しみ、緊張と不安を強いられたか忘れないために、三月末までの大まかな出来事を記録しておいた。

そして震災からおよそ三ヶ月たった六月十八日。

海江田経済産業相（当時）は、各原発に指示した安全対策について「適切に実施されている」と、地元自治体に原発再稼働の要請。二十九日に会談した佐賀県玄海町長は再稼働「容認」を表明した。

福島第1原発は冷温停止もままならない状況にあって、復興の足かせになっているのは誰の目にも明らか。まさか三ヶ月かそこらで「再稼働」のハナシになろうとは。「がんばろう！」の方向が違うだろって！

てゆーか、ドイツもイタリアもさっさと「脱原発」に鞍替えしたのに、日本はゲンパツまだやるんかいっ！？

しかしまもなくして、六月二十六日に生中継で行われた佐賀県民への説明番組「しっかり聞きたい、玄海原発」（主催：経産省）で、九電が「原発賛同」の世論を誘導するため、「やらせ」メールを自社や関連会社宛てに指示したことが発覚。県知事の関与も指摘された。

さらに九月三十日、「やらせメール」質問依頼などを調査していた第三者委員会は、北海道電力泊、東北電力女川、中部電力浜岡、四国電力伊方、九州電力玄海の原発をめぐる過去五年、計七件のシンポジウムで、賛成意見を述べることや、参加者の動員をもとめる「やらせ」に、国（経産省原子力保安院）の関与があったことを発表した。

国も企業も自治体も（学者も）、国民に対してフツウそこまでゲンパツの「PR」する？しかも「やらせ」だの「仕込み」だの「サクラ」だの、はたまた「電気がないと夕

イヘンですよ」って危機を煽ったり、まるで要らないものを買わせるあやしい商売みたい。てゆーか、そこまでして電気使って、もっと「発展」しないとダメ？？

…と、ここまで書いてハタ、と思った。

「国家の近代化・発展」という「坂の上の雲」を目指して、人の迷惑顧みず、ただひたすら「幻想」を追いかける、一部のエリートによる「上から目線」のストーリー…。

そして計画ありき、で始まって、産・官・学が一体となって、広めるために著名人を動員し、地域だけでなく教育現場にまで、考える間もないほど大量の「PR」とお金を投下し、おなじみの「神話」を繰り返し、浸透させ、世論を誘導し、異論は「政治的な少数派」と排除する…この構図。

「ゲンパツ」と「サカクモ」、あるいは、「ゲンパツ行政」と「サカクモまちづくり」ってどこか似ている。

「坂の上の雲」が産経新聞で連載されていたのが、一九六八～七二年。福島第1原発着工が六七年。六四年には東海道新幹線開通や東京オリンピック、七〇年は大阪万博開催。イケイケドンドン、まさに「坂の上の雲」を目指した時代。

高度成長期にモーレツ社員だったオジイサマがたや、高度成長期に生まれ育ちバブル経験者のオジサマがたが、「坂の上の雲」という甘酸っぱい響きに愛おしみを覚えるのも無理はない。

しかし同時に、活発な産業活動が排出した有害物質は水や空気を汚し、公害病が社会問題となった。「エコ」も「持続可能社会」なんて言葉もない時代。「平和利用」するはずだった「夢の原子力」が、四十年後に「環境破壊」を引き起こし、人間から土地や暮らしを奪うことになろうとは。

余談だけど。

「サカクモ」の主人公である秋山真之は乃木希典に宛てた手紙で「四、五万の陸軍兵士が犠牲になったとしても、さほど大きな犠牲ではない。国家の存亡がかかっているのだから、どうか旅順の要塞を落としてくれ」（※）と頼み込んでいる。「郷土の偉人」とはいえ、彼の「合理主義」を私たちが讃えて大丈夫？

「国家存亡の危機」の時代を描いた物語に、現在の自治体間競争をなぞらえて、「青雲の志」の主人公になりきるのは勝手だけど、震災後、誰かが犠牲になる仕組みや、「もっともっと」を求めた「坂の上の雲」の時代に反省こそすれ、「あの頃の夢をもう一度」という気分になれる人などいるのだろうか。

それよりも「ほどほど」という環境持続性だったり、「競争」ではなく、価値観の違う知らない誰かと手をつなぐ、「共生」の意味を多くの人が実感したのではないだろうか。

九月二十二日、野田首相は国連本部の会合で、原発の「安全性」を高め、再稼働や輸出を視野に、今後も「活用」を続ける考えを示した。

サカクモ嫌いの言いがかりとのお叱りを受けそうだけど、もういい加減、「ゲンパツ」や「サカクモ」など、成長神話（信仰？）なんかすがるのやめて、坂の上でなく、足もとを見つめて自分たちのオリジナルの物語をつくろうよ…と、しがない一市民として思うのだ。

※「実に二〇三高地の占領いかんは大局より打算して、帝国の存亡に関し候えば、ぜひぜひ決行を望む。（中略）旅順の攻略に四、五万の勇士を損するも、さほど大なる犠牲にあらず、彼我ともに国家存亡の関するところなればなり。」（一九〇四年十一月三十日に乃木宛に出した手紙）／『秋山真之』田中宏巳著　吉川弘文館

2012 - 35

原発PR館 アリス館志賀に行ってきました

藤井玲子 文／絵

風薫る新緑がまぶしい五月の休日。石川県羽咋郡にある「アリス館志賀」を訪れました。

北陸地方になじみの薄い四国の皆さまにご紹介しましょう。

「アリス館志賀」は北陸電力志賀原発に隣接する、PR展示施設でございます。

松山と同規模の五十万都市、金沢市から半径五十キロ…そういう言い方は物騒ですね。金沢市から車で一時間四十分。すぐそばには、松本清張原作の映画「ゼロの焦点」のロケ地で知られる「巌門」や「ヤセの断崖」など、活断層と荒波…じゃない、厳しい自然が織りなす海岸線の美しい、北陸随一の景勝地にございます。

能書きはこれくらいにして、さっそく館内へまいりましょう。

まず入り口では、看板に描かれた、美少女キャラ「アリス」が入館者をお出迎え。

「館内での物売り・ビラの配布・貼付け・宗教・政治活動を禁じる」と、なかなかてごわいアリス嬢。ま、確かに家族連れでにぎわう館内で「過激な原発反対派」にビラでも配られたらイメージ台無しですもんね。

ところで、いつもと言葉遣いが違う、って？　だって「反原発は集団ヒステリー」なんて思われたら心外ですもの。それにルポは感情を排し公正に…とはいえ、かえってイヤミったらしい気がしなくもないので、いつもの調子に戻らせて頂きます。ゴホン。

まず最初の展示。「まほうの絵本」のコーナーでは、大型テレビ、エアコン、電気調理器などオール電化ライフを満喫するアリスに向かって、ドゥドゥ鳥さんが、

「電気がなくなると、この生活が出来なくなるよ」

と不安を煽る。さらに、資源の少ない日本において、クリーンで安定したエネルギーの供給のため、原発の必要性と「ベストミックス」を訴える。オマエは「どじょう」か!!

次の「3月うさぎの鏡の間」では、近年の異常気象や地球温暖化を怖れる「3月うさぎ」さんが、解決策として二酸化炭素を出さないエコな原発を紹介。自然エネルギーはまだ技術的にも供給量的にも不安定なんだとか。

そしてお隣の「ファンタジーシアター」では、伯爵ウサギを追いかけたアリスが、志賀原発一号機の二十五分の一模型の中に迷い込み、原子炉内部で（!）発電の仕組みについて説明を受ける。

「沸騰水型軽水炉」だとか「ウラン235」だとか専門的な説明にも動じないアリス嬢。もしかして「不思議の国」じゃなくて、「原子カムラ」の人っ!?

なにより説明中、アリスとウサギさんの頭上で青白く輝く核燃料集合体がなんとも不吉。「ファンタジー（シアター）」ねぇ…。

それにしても、かたときも目が離せない、聞き逃せない、てゆーか、開いた口が塞がらない展示内容は、思い出すだけでも息苦しささえ覚えるほど。

息抜きに中央制御室の操作盤模型で遊ぶことに。スイッチやボタンのアナログでキッチュな感じが、いかにも七十年代っぽくて、アラフォー世代にとっては懐かしい…てか、今でもこんな装置を使ってるの!?

数々の疑念を振り払うように、「不思議なパイプオルガン」のコーナーへ。

制御棒をパイプオルガンのパイプに模して、安全の仕組みについて説明。

荘厳なパイプオルガンの響きに合わせ、青白く光り上下する制御棒。それを背に、自らの腕前に酔いしれ微笑むアリス…。

するとあろうことか、最後の一音を弾き間違えてしまう。

うさぎさんは、

「原発は間違えないんだよ」

と、一喝!!

「今度は絶対間違えないわ!」

気を取り直し、張り切るアリス。

「今度は」って言われても、ねぇ…。

なかばやけくそ気味で「シアターキャッツ」へ。

チェシャ猫がミニシアターで『安全を守るしくみを紹介』…とあるが、コーナーに入ってみると、『少しの間、お休みします。今具合の悪いところを直しています。ごめんなさい』だって。

「具合が悪いところ」とゆーか、「都合の悪いところ」? それとも、「ミニシアター」のことじゃなくて、不具合が多く、「定期点検中」が続く一、二号機のこと?

勘ぐってしまう…。

そばにあった原発の安全性を強調するための「5重の壁」の模型も、こんなのが吹っ飛んだのかと

思うと、生々しくかえっておそろしい。

その他、医療に役立つ放射線を説明する「アオムシ博士の青空教室」や、放射線の測定器で身近なものを計ったり、核燃料（館内では「原子燃料」と表示）サイクルについて自説を開陳する「トランプ庭師の発表会」が続く。

疲れ切ったココロとアタマを休めようと、二階のゲームコーナーへ。

「核分裂ゲーム」はウラン235に中性子をぶつけるというもの。

「君は何回核分裂を起こせるかな」って、煽られても…。

「絵合わせゲーム」は「止める・冷やす・閉じこめる～挑戦したいゲームをクリック～時間内に完成させてね」。これができりゃ誰も苦労せんわ!!

ふと見渡すと、子ども達が列を作って賑わっているコーナーがある。

なにかと思えば、核燃料ペレット（模型）をつかみ取りする「ユーフォーキャッチャー」。

「三つ取れた！」などと、無邪気にはしゃぐ子ども達。全然ほほえましい気持ちになれないんですけどっ！

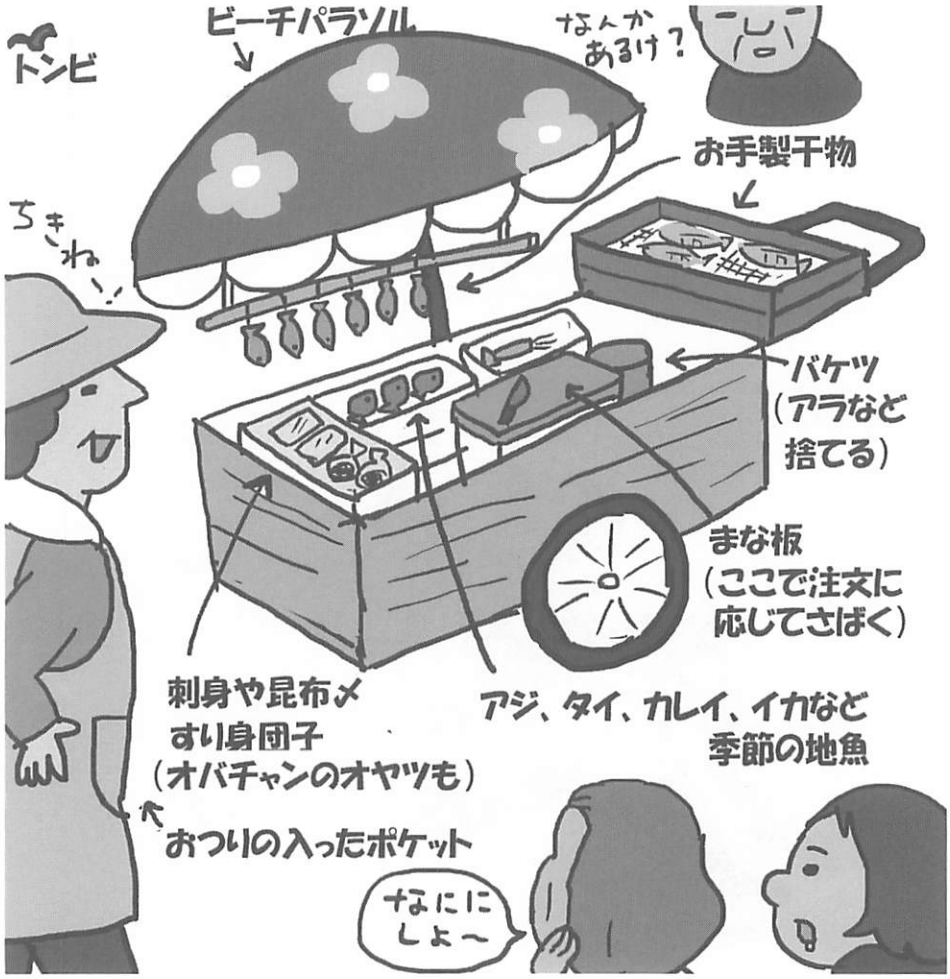
茶化すつもりは一切ない。だけど、こんなふうに原発事故以前となんら変わらぬ電力業界の頭の中を見せつけられると、「安全基準」より、「当事者意識」をまず見直す必要があるんじゃない？ と、怒りを通り越して、ため息が出るのだった。

※追記　七月、経済省原子力安全・保安院が志賀原発一号機の原子炉建屋直下に活断層の可能性を指摘。八月に入り北陸電力が再調査を開始した。活断層と判定されれば廃炉になる公算が大きい。

2013-36

脱美魔女

藤井玲子
文／絵



夫の仕事の関係で、昨年から石川県輪島市に暮らしている。

金沢を中心とする内陸の加賀地方と、そこから突き出た半島部分にあたる能登地方とでは、風景もさることながら、人の気質も随分と違う。

「加賀のかか楽、能登のとと楽」とは当地で有名な言葉。お茶やお花などの習い事、加賀友禅に九谷焼…加賀地方では女性が喜ぶ文化に事欠かないのに対し、能登地方では働き者の女性に支えられ、男性が楽をできる…。そんなふうに例えられている。

実際「日本三大朝市」のひとつ、輪島の朝市へ出かけてみるとよくわかる。朝早く並ぶ出店から聞こえてくるのは、元気なオバちゃんの声ばかり。男性の店主は数えるほどだ。

「カニ買うてくだぁ（ください）！」。威勢のいいのは漁師のオバちゃんたち。一方、畑で採れた野菜を売る農家のバァちゃんらは手拭いでほっかむり、分厚いコートを何枚も重ね着し、寒空のもとじっと座って客を待つ。

輪島塗を売る塗師（ぬし）屋のおかみさんたちも負けじと観光客を呼び込んでいる。

すると向こうから大きなリヤカーを押しながらヤクルトを売り歩くおばあちゃんがえっちらおっちらやってきた。

（もしかして現役最高齢のヤクルトレディ！？）と、思わず、

「お元気ですね？おいくつですか？」と尋ねてみた。
ばあちゃんは
「なーもなーも（なんにもなんにも」と謙遜しながら、
「七十四！」と答えた。
案外若かったので、返答に困った。

「アンチエイジング」というのが流行っているようだ。
スポーツクラブのランニングマシーンで走りながら何気なくテレビを見ていると、「アンチエイジング」で有名な男性医師が紹介されていた。
「五十六歳には見えない」のがウリだそうだが、私には年相応にしか見えなかった。ってゆーか、単なる「若作り」とどう違うの？
まして毒々しい美魔女や美熟女なんかより、先の「ヤクルトレディ（ばあちゃん？）」の方が、よっぽど生命力と生活力（感？）にあふれ魅力的だ。
一緒にテレビの画面を眺めていたインストラクターのニイチャンは、「田舎の人は苦労しとんのですよ。」と、仕方なさそうに笑った。
実家の母を見舞いに神戸へ帰った時のことだ。
昼食にデパートの中にあるカフェに入った。
隣の席では「ママ友」たちがランチをしていた。小学校に上がるかどうかくらいの男の子が、「ボク、ジェラート！」とねだっていた。
三十代とおぼしきママ友たちは、化粧も服装もムリが無く、バッグや小物にそっと高級品を身につけ、「さりげないけど実は手（とカネ）をかけています」感がイヤミなほど（主観です）漂っていた。
ママ友たちを横目にアイパッドのメニューに四苦八苦しつつ、それにしても、同じ「オンナ道」をどこではずれたのか…。思わず遠くへ来てしまったものだ。後戻りできない年月の重さを知る。

輪島へ戻ってくると、なじみの魚の行商のオバちゃんが
「ちきねー（しんどい）！！」と恐竜のような叫び声をあげながらリヤカーを押して、いつもの時間にやってきた。
「昨日、市民会館に五月みどりを見に行ったけど、若作りのうえ、色気ムンムンで気持ち悪リかった！」と、ゲンナリしていた。
そーだよね。「アンチエイジング」なんてへンだよね。
オバちゃんの口元のほうれい線と金歯を見つめながら、カレイの干物を受け取った。（加齢、だけに）
やっかみを込めて言おう。
私は美魔女なんかちっともうらやましくない！
それよか、能登の女性のように強くたくましくありたい！！
「とと楽」させるほどの甲斐性はなさそうだけど…。

余談だけど…
輪島では朝市以外に、「降り売り」という行商が残っている。地区ごとにおばちゃんたちの縄張りがあり、雨の日も風の日も雪の日も、毎日決まった場所を売り歩く。魚は身内から仕入れ、リヤカーを自分で押すので、仕入れが安いうえ、人件費・テナント代・保管料・燃料費もかからない。低コスト・低エネルギーの商業形態として見直されていいはずだ。

2013・37

ホメホメ詐欺

藤井玲子
文／絵

京都に八十四歳になる伯母がいる。伯父（父の兄）が十五年ほど前に他界してからひとり暮らしをしている。伯母には子供がいないため、神戸の実家へ帰るついでに様子を見に行くようにしている。

桜の開花が随分早かった今年の春。伯母の家でくず餅をほおばりながらお茶を飲み、近況を語り合っていた。

「最近電話のセールスが多くて…この前も手紙で断ったのよ〜」。だいぶ耳が遠くなったとはいえ、伯母がいまだしっかり者であることに安心した矢先、電話が鳴った。

「おたくはどこの会社やったかな？どの契約？たくさんあるからわからへん。いやぁ〜それはこの前お断りしたはずですが…」。

京都人らしいあいまいな物言いにイライラしてきた私は、「おばちゃん替わるわ！」と受話器を取り上げ、「家族の者ですけど！これ以上電話をかけてくるような、消費者センターに連絡しますよ!!」と言って電話を切った。

伯母は「さすが玲子ちゃんやわ〜」と賞賛しきり。いやいやいや、感心してる場合じゃないってば。全然断れてないし。てか、「どの契約」？「たくさんある」？って、なにそれ？イヤな予感…。

あまり厳しく詰め寄っては、口をつぐんでしまうかもしれない。私はマリア様のような優美な微笑みをたたえ、内心は鬼刑事の執念でこれまでの経緯を聞き出した。

すると美術関係で少々名の知れた伯母の元に、この一年足らずの間に少なくとも同業五社からの勧誘があり、なかには契約を交わしたものもあることがわかった。ざっと書き出すとこんな感じ。

L社　展覧会への出展費　二〇万円
I社　デジタル画像配信　一〇万円
Y社　展覧会への出展費　九六万円（三六万円＋三〇万円×二回）
R社　展覧会への出展費　二八万円
図録作成　五〇万円
C社　展覧会への出展費　一〇万円

勧誘の総額は二〇〇万円を超え、L社とI社は電話で断り契約に至らなかったものの、Y、R、C三社とは計一八四万円の契約が結ばれ、すでに六〇万円ほどが振り込まれていた。

アタマに血が上るのをぐっとこらえ、伯母に「これだけ契約して、これだけ残金があるよ」と明細を知らせると、

「そんなにたくさん!? 知らなかった…」と、言葉を失った。

どうやら伯母はしつこい勧誘に対し、「もう年寄りで体も弱いから展覧会は無理です」と正直に断っていたようだ。しかし業者に

とって「ネガティブ情報」ほどありがたいものはない。

「写真パネルでの展示なので作品の搬出入のご負担はありません。」と安心させ、再び伯母が断れば、「先生の作品『青い目の女の子』に一目惚れをした。忘れられない。是非多くの人に見てもらいたいので出展してほしい」と持ち上げた。そしてあちこちに「先生」「先生」とちりばめた手紙には「ご検討ください」と「契約申込書」が同封され、律義な伯母は内容を確認せず習慣的に記入・捺印→返送→契約成立…と、こんなところだったようだ。

とりわけY社とR社は、ひとつの契約（三〇万円前後）が分割払いだったため、一回あたりの支払いが三～五万円と一括払いに比べ、経済的負担がさほどでもないかのような錯覚を起こさせた。

名前も内容も似通った契約話が複数の業者から次々と持ち出され、「これくらいなら」と応じるうち、伯母はしだいに契約内容や支払い状況を把握できなくなっていた。

ほだされて、良い気分になって、「まぁ、一件くらいは」と契約を結んでしまう気持ちはわからなくもない。多くの人に作品を見てもらえるなら…と、伯母とてまったくその気がなかったわけでもないだろう。とはいえ、混乱している高齢者に高額で長期のローンを次々組ませること自体、社会的にどうよっ!?

明細を書き出した後、叔父とケアマネに連絡し、最寄りの消費生活相談センターへ行くことにした。家族に付き添われ初めてセンターを訪れた伯母は、なにが身の上に起こったかわからず不安そうだった。

担当者は消費者被害に遭ったことに伯母や私たち家族が動揺しないよう、責めることなく、丁寧に自ら望んだ契約なのか、断り切れず交わしたものなのか、一件ずつ契約に至った経緯と伯母の意思を確認していった。

そして聞き取りが終わるや、まず勧誘のしつこい未契約の数社に対して電話で「再勧誘の禁止」と伝え、関連会社からも勧誘しないよう念を押し、さらに担当者の名前を聞くのも忘れなかった。

また既契約分については、「書面不備」をチェックし、契約日の抜けている契約書面を見つけ「無効」と判断。そして支払いが継続中の契約については、「既払い金の放棄」、つまりすでに払った金額はあきらめ、残金は免除してもらうよう業者と交渉することにした。

しかし、話し合いの最中も、伯母は業者から送られてきたカラー見本を持ち出し、「よう私の作品を知ってはるわ～。でもなんで写真も渡してへんのにパネルや図録ができたんやろう」と、感心しているようでさえあった。

ネットから画像をとりこみ、簡単に印刷できることなど知らぬ「高齢者」であるうえに、「よそさん」を警戒するわりに、一度信じてしまうと、あとは「えーよーにしといて」と気前よくお任せしてしまう「京都人」であることが、被害を拡げるのに十分作用した。

東本歯科
院長 渡部浩太
〒七九〇―〇九一六 松山市東本二丁目四―七
TEL 〇八九―九四一―五五五五

それにしても一度交わした契約を取り消すのは大変なことだ。しかも家族が気づく頃には契約が複数にわたっていることが多い。

支払いができないこちらの事情と、免除を願う文書を業者ごとに作成しなければならない。認知症の疑いがある場合、医師の診断書があればより有効だろう。

消費生活相談センターの仲裁によってトラブルが解決したのは二ヶ月近くたって後のことだった。

余談だけど――

美術品だけでなく、俳句や短歌でも「素晴らしい作品」とおだて、作品掲載の「次々勧誘」が問題となっている。

詳しくは国民生活センターのホームページ「高齢者の消費者被害」をご参照ください。

今宵も愉快にやりなされ
助格
0120-47-0007
■三番町店／三番町２丁目 ☎932-8118
■湊 町 店／湊町３丁目 ☎947-0828
■二番町店／二番町１丁目 ☎948-0008
■天 山 店／小坂５丁目 ☎934-1188
■年中無休 ■17:00～ ■宴会 ～60名

婦人衣料
天下のヒゲ店
おしゃれな普段着から
フォーマル・ダンス用品まで
宇和島市恵美須町銀天街
TEL 0895-22-1730

2014-38

星のおじいさま

藤井玲子
文／絵

西岡センセイと初めて会ったのは、私が愛媛に来て最初の年、二〇〇二年の夏だった。

川内町の旧滑川小（生活改善センター）で行われるペルセウス流星群の観測会で、センセイは主催者「すばる星空友の会」の会長だった。

集落がひっそり寝静まる頃、蚊取り線香を朦々と焚いた宿直室で、センセイのおはなしが始まる。

「みなさん、星はいくつ見えるか知ってますか？だいたいこの北半球だけで三〇〇〇個見えます。だから星はサンゼンと輝くのです！」

年季の入ったおやじギャグでつかんだかと思えば、手書きのイラストをＯＨＰで投射し、ギリシア神話、三国志、七夕伝説など、星にまつわる話を縦横無尽にくり広げた。大人も子供も星座でアタマがパンパンになったころ、校庭で望遠鏡を合わせていた西田事務局長が呼びに来る。

「さぁ、空が晴れてきましたよ」

待ってました！と校庭に走り出て夜空を見上げる。

「最近の子供は実際の星空を眺めることを知りません。宇宙の広さ、神秘、星や星座を見つける喜びを知ってほしいのです」

そして宴たけなわ、センセイ考案、「西岡式腕長指間法」の説明になる。

センセイは大きな体からぐいと長い腕を突き出し、真っ暗闇の先にある水平線をにらみつけ、親指を起点に人差し指を尺取虫のように這わせ、みごと北極星を探し出す。大人も子供もセンセイにならって競うように夜空に向かって腕を突き出す。清らかに輝く北極星にたどりつき大はしゃぎ。

なんでもセンセイは戦争中、この「腕長指間法」で北極星を探し、自分が乗っている輸送船が南方に送られるのを予測したのだとか。軍事機密ゆえ、本人にさえ行き先を教えられなかったという。

医療法人
浅井歯科医院
浅井謙次
〒七九一―〇二四二 松山市北梅本町六六五―二
TEL 〇八九―九七六―三一六四

センセイは大正十年、北条の生まれだ。師範学校を出てすぐ兵隊にとられ、復員後、長らく小学校や中学校の校長先生をしていた。

生徒一人一人に声をかけるよう心がけていたそうで、八十歳を過ぎても、デパートのエレベーターで騒ぐ子供に向かって、

「なかなか活発な坊やですなぁ」と、おおらかに笑いかける、いつまでたっても「センセイ」な人だ。（親はさすがにバツが悪そうだった。）

「ホメて伸ばす」のがセンセイの神髄かと思いきや、中学の教え子、ヨシノウチ君（昭和十二年生まれ）によると、センセイは「鬼の西岡」と呼ばれ、旧日本軍仕込みの「鉄拳制裁」も辞さなかったという。

センセイに真偽のほどを確認すると、「そんなこともありましたかなぁ。ハッハッハッ！」と笑ってゴマかした。

好物のぼた餅を食べ過ぎて奥さんに怒られている時も、「ほうじゃったかのお？」…と、都合が悪くなるとひたすらトボけ、一緒にいる私に向かって「いやぁフジイさんはお若く見えますなー。女学生のようですな」「大和撫子の優秀な秘書や！」などと、極端な話を振ってその場をしのいだ。

そんな隙だらけとも言えるセンセイの目が、小さく鋭く光る時がある。その底知れない暗さに、わたしなどとうてい立ち入れないセンセイの来し方を感じずにおれなかった。

センセイは激戦地ビルマで終戦を迎え、二十二年三月まで英軍捕虜として労役に服した。

ギリシア神話や三国志などの話術は、知的好奇心に飢えた隊員たちにせがまれることで磨かれた。

一人一日米一合しか支給されず、英軍キャンプへ着くなり列を乱してゴミ捨て場へ走っていく隊員たちをセンセイは指揮官でありながら制止できなかった。空腹がわかるからだ。休憩時間、英国軍曹に呼び止められ、缶詰のチーズを手渡された。そのおいしさと思いやりの心に、「戦争だけでなく文化でも負けた！」と、その時初めて日本の敗北を認めたそうだ。

『国家』なんて観念はどこにもなかった。ただ、家族を守るんや、こうして自分が闘っている間に少しでも家族が無事であれば」

「おとうちゃん、おかあちゃん、死にとうない。生きていたい。特攻隊員は敵機に当たる寸前までそう思っていたでしょう。ただ闇雲に若さに任せたわけではないのです。それがわかるだけに身につまされます。家族を守る、それ一心です」

センセイは、戦没兵士やその遺族の素朴な気持ちを若い世代が「軍国主義的だ」と突き放したり、まして政治家が票集めに利用することに複雑な思いをもっていた。

ちょうどその頃、二〇〇三年三月、イラク戦争がはじまり、翌二〇〇四年一月、日本も陸自を派兵、アメリカに追随した。六月には国民保護法を含む有事関連7法が成立。同六月、松山では『坂の上の雲のまち再生計画』が国の地域再生本部（本部長：小泉元首相）

より認定された。

それでなくても国が十分キナ臭いところに、松山の「まちづくり」までもが同調してどーするよっ！と思っていたワタシは、センセイにとって「戦争前夜」を語り合う格好の話し相手だった（と思う）。

「いやぁ、あなたと話しとると、三十年寿命がのびるようですわい」

センセイの口癖を聞くたび、「何歳やねん！？」って、心の中でツッコんでいた。

ま、たしかに、刺身定食をペロリとたいらげ、さらに抹茶ソフトでしめる健啖ぶりを見るにつけ、ずっとこんな時間が続くような気になっていた。

昨年の二月、センセイは星空に旅立った。いつかこの日が来るのはわかってたけど、彗星の予測のようにはいかず、離れて暮らす私にとって、突然の知らせだった。

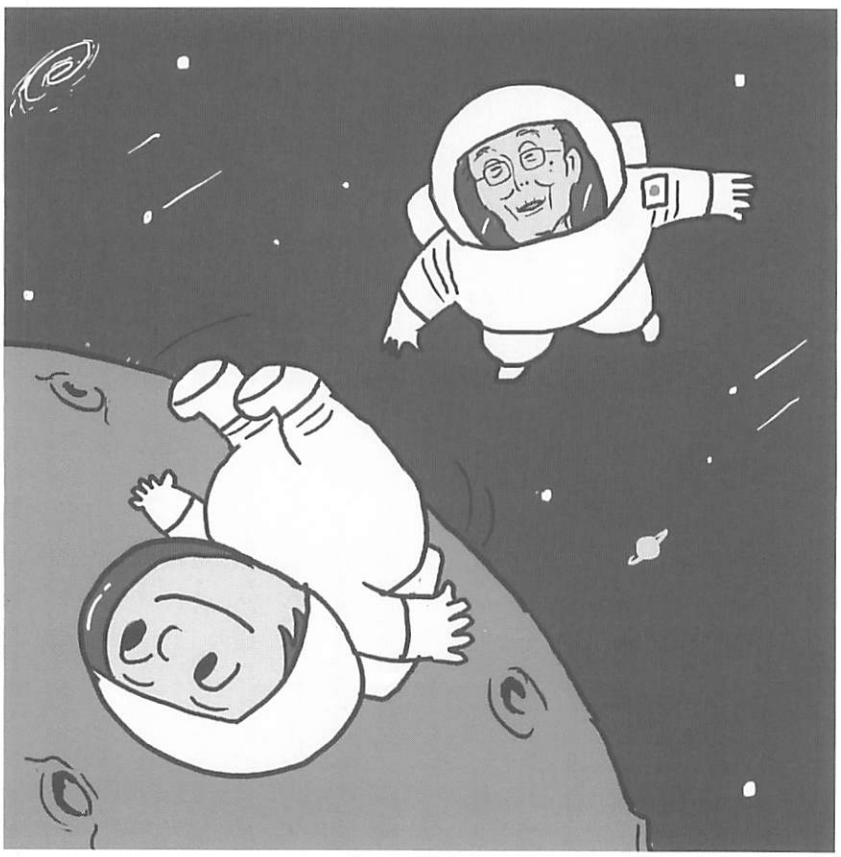
夏の夜空に泰然と輝く赤いおじいさん星、さそり座のアンタレスはセンセイの星。また会える。そう思うことにしよう。

そして十二月。安倍内閣のもと、外交・安保の司令塔となる「日本版ＮＳＣ」と「秘密保護法」が成立。集団的自衛権の容認や武器輸出三原則の見直しなどやりたい放題だ。

前線に行きもしない、本当の残酷さ、悲惨さを知らない一部の政治家たちによって大事なことが決められ、「個人」より「国家」の利益が優先される…まさにセンセイがいまいましく思う事態だ。

ワタシとて行き先も知らされない輸送船にいきなり押し込められた気分。

暗闇の大海の中、自力で北極星を探し、自らの行く末について腹をキメる覚悟のないワタシ。どうやって船から降りるか…そればかり考えている。



2014-39

オラたち転勤族

著者近影

藤井玲子 文／絵

奥さん、関西?

いわゆる「転勤族」である。どうせ暮らすなら「地元民」として、その土地の文化・慣習を肌で感じて暮らしたい。「郷に入っては郷に従え」。方言のマスターに始まり、その陰で簡単な地理・歴史のお勉強、地元の人たちとのコミュニケーション…。日本に暮らす外国人のように、その土地土地に適応してきたつもりだ。

以前松山の道後に住んでいたときのこと。

夕方温泉に行くのを楽しみにしていた。スーパー「●ジ」のレジ袋に着替えやシャンプーを入れ、観光客が多くあわただしい「本館」を避け、「地元民」中心の「椿湯」へ。熱めの湯に浸かった後は、脱衣所でばあちゃん達の松山弁を上がり湯代わりに浴び、観光客のように土産物屋を冷やかしなどせず、いかにも「地元民」が行きそうな飾り気のないお団子屋さんに立ち寄った。

「ここの醤油餅はおいしいけんね!」なんて、覚えたての伊予弁で調子をこいていると、店のおばちゃんに「奥さん、関西?」といきなり冷や水を浴びせられた。

な、な、なんでバレたんやぁ…。さらにおばちゃんは、「関西、どこっ!?」と強い口調で追及の手をゆるめない。

私は出身地の神戸にたいした思い入れがない。むしろ「オシャレイメージ」みたいな思い込みが鼻持ちならず、阪神大震災後の行政不信も相まって、反射的に「大阪です」と答えてしまった。おばちゃんは、「ほな垢抜けてもらわんといけんね」と一言。醤油餅を手渡された。

小・中学校時代を千葉で過ごしたため、転校先の神戸の同級生から「東京弁や〜」とからかわれた

ほど。私の関西弁はキツくない。（※個人の感想です）

「フジイさんって、関西弁出ないねー」なんて言われることもしばしばだ。なのに、なぜバレた。

話は変わって。

4年前、松江に住んでいたときのこと。山陰の小京都。城下町の風情が残り、堀川や宍道湖の景色が美しい水の都…。

松江大橋のたもとの甘味処でお団子を食べた帰り道。ラフカディオ・ハーンも「カラコロ」とゲタの音を鳴らしてこの橋を渡ったのかしら…なーんて浸っていると、橋向こうからガヤガヤなにやら騒々しい一団が…。

「田中さんどこ行かはったん？」「あんた何言うてんのん！」。

この大声、この威圧感。間違いなく関西のオバチャンやぁ～…。

恥ずかしいので目を合わさないでおこうと避ける私を、シャイな地元民と思ったのか、オバチャン3人は「こんにちはぁ～」とグイグイ満面の笑みを向けてきた。他人のフリ、他人のフリ…。

またまた話は変わって。

先日立ち寄った大阪のデパートで、買い物に来ていた中国語を話すグループを見かけた。真新しいブランド品や、ちょっと独特な服のセンスと大きな声で人目を引いていた。あからさまに眉をひそめる人もいた。ワタシもため息をつきかけ、ふと、松江大橋での記憶がよみがえった。

あれ？　これって「関西人」を見る眼差しと同じやんかっ！！

開き直るつもりはないが、私は人権感覚にあふれたリベラリストなどほど遠く、それどころか、そそっかしく、うっかり人を傷つけ、偏見に満ちた心の狭い人間だ。

そんな私でさえ、近頃の差別をあおり便乗する風潮に抵抗感を持っている。

「奥さん、関西？」。

予断と偏見にみちたこの言葉が自分に向けられるたび、いわれなきレッテル貼りに戸惑う人を身近に思う。（てゆーか、思い込みで決めつけがちな私は、逆の立場になる可能性の方がよほど高い。）

耳目に触れる強気の言葉に心落ち着かぬ今日この頃。茶飲み話で近隣国への批判が話題にあがれば、「まぁ昔の日本もそうだったよね」とか、「関西人と一緒やね（苦笑）」と、「自分を下げても人は下げない」関西人の徳目の一つである〈自虐〉でもって、とげとげしくなりつつある場の空気にチャチャを入れ、「消極的平和主義」を実践している。

能登のかあちゃん

「加賀のかか楽、能登のとと楽」という言葉をご存じだろうか。今、私が暮らしている石川県では有名な例え言葉だ。

金沢を中心とする加賀地方では、お茶や加賀友禅、九谷焼など、女性が楽しい文化が盛りだくさん。一方半島の先端にあたる能登地方では、女性が働き者なので父ちゃん達が楽をできる…ま、ざっとそんな感じ。

輪島の朝市をのぞいてみればよく分かる。母ちゃん（&ばあちゃん）達のたくましいこと！雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ、夏ノ暑サハヤクルト飲ンデ、冬ノ寒サハ火鉢ヲ抱エ、イツモ座ツテ客ヲ待ツ…みたいな。

日本3大朝市の一つである輪島の朝市は、年末年始と月2日の定休日を除き、毎日開かれている。

延長360メートルに約200件の露店や商店が並ぶ（ウィキペディアによる）通りを、サイフのヒモのゆるめることなく通過する

医療法人
浅井歯科医院
浅井謙次
〒七九一―〇二四二 松山市北梅本町六六五―二
TEL 〇八九―九七六―三二六四

のは至難の業だ。

どこも同じように見えるお店だが、通い詰めておば（あ）ちゃん達と言葉（とお金）を交わすうち、それぞれの個性を発見できる。地元民ならではの楽しみ方だ。

来年春から始まるＮＨＫ朝ドラの舞台となる輪島。

ぽあん読者のみなさまには、私が3年の歳月と身銭を切った「輪島朝市」の研究成果をお伝えしたい。

まずは輪島朝市を「山系」、「海系」さらに特産品である輪島塗の「漆器系」とざっくり3つ、勝手に分類。

手ぬぐいやスカーフでほっかむり、シャイな装いで野菜や山菜、梅干し・漬け物を売っている「山系」おば（あ）ちゃんは「なんか買うてくだぁ～」と、セールストークもかなり控えめ。

同調性が強いのか、同時に似たような作物をつくるため、店に並ぶのも全部同じ作物…という残念なことも。

一方、漁師のおばちゃん達で構成される「海系」は積極的な接客。蠅たたきを振り回しながら、

「にいちゃんいつ帰るんけ？」「値段だけでも聞いて～」…など多彩なトークを駆使して観光客の気を引いている。

露天の後ろでひっそり店を構える「漆器系」のおばちゃん達は、往年の栄華をそこはかとなく感じさせる上品さ。英語で「ジャパン」の漆器も、値段の安いものは「チャイナ（製）」なので、よく確かめて買ってほしい。（※良い品は本当にすばらしいので、当地へ来る機会があればぜひ手にとっていただきたい）

9月の連休中、親戚に干物を送ろうと観光客で賑わう朝市にでかけた。

「なんか買うてくだ～」と、顔見知りになったばあちゃんに声をかけられた。500g700円、地元産の栗かぁ。粒が不揃いなのは、作っている人が高齢で農薬をあまり使わず、虫がつく前に収穫したからでは…などと勝手に想像する。

「残りの一袋も買ってくれるとあっさり（スッキリ）する。持って帰ぇるのは重いさけ…」と、泣きゴトを言う。ま、これくらいの量なら栗ご飯がたっぷりできるか…と思い、買ってあげることにした。

するとそれを見てた隣のばあちゃんが、

「わたしからもなんか買うてくだ」と、膝をさすりながらうらめしそうに私を見上げる。なんか人間性試されてない？　いたたまれず、人参（100円）を買う。

ようやく目的の店にたどり着き干物を送った帰り道、露天のテントを支えに座っている、かなりヨボヨボのばあちゃんと目が合ってしまった。ゴザの上には1キロ1000円の栗。さっきのばあちゃんのより安い！　もうやけくそ。今晩は栗づくしや！

それにしても、干物や鮮魚、カニなどの「海系」はともかく、「山系」は一袋100円とか200円で、儲けがあるのかなぁ…と心配になってくる。

アマチュアカメラマンのオッサ

ンが、ばあちゃんにカメラを向けながら、

「ごめんね〜買い物もしないで写真だけ撮って。モデル料払わんといかんね〜」なんて得意げに写真を撮ってるのを見ると、

「じゃあモデル料として、なにかひとつでも買うてやれよ！」と後ろからケリを入れたくなる。

ばあちゃん達は慣れているので「いいよ、いいよ〜」と笑っているけど、買ってあげたときの輝く笑顔を私は知っている。

エリート女性ばかりが対象の「女性が輝く社会」なんて、ぜんぜんピンと来ない。そもそも楽しそうじゃないし。

それよりも朝市のおば(あ)ちゃん達みたいに、お客さんとやりとりしながら魚をさばいたり、軒を並べる顔なじみのメンバーとおしゃべりしながら野菜を売ったり、自分で作った小物を自分で値段を決めて売ってみたり、ひょっとすると店を出すこと自体が生き甲斐だったり…。こんなふうに身体の動くうちは働く場所があるって、いいなぁと思う。（そのためにも1個売っていくら儲けて…というなりわいが成り立つ社会であってほしい。）

「能登のとと楽」こそ、実は「女性が輝く社会」、「かか楽」だったりして！？　輪島朝市のばあちゃんたちから学ぶ思いがした。（「授業料」もそーと一払ったが）

買ってきた2キロの栗で7合分の栗ご飯を作り、近所にお裾分けしてまわった。

私が毎度朝市でカモられてくるのを知っている向かいのおばちゃんは、

「気の毒な〜（ありがとう）」と栗ご飯を受け取りながらコトを察して、

「あんたぁ〜朝市に行ったらダメやがいねー」と大笑いした。

2015-40

小2病

藤井玲子 文／絵

今年の正月も夫の実家で過ごした。子供のいない私たちにとって、甥っこ・姪っ子と過ごす時間は新鮮で楽しい。

春から小学2年になる甥っ子ユータは反抗期真っ最中。つい最近まで赤ちゃんだったクセに、今では「別にぃー」とか「無理ィー」とか、かわいくない。

お年玉をあげる時だけ身を乗り出してくる。

「サンタクロース（↑まだ信じている）からなにもらったの？」と聞くと、

「妖怪ウオッチ!!」

やっぱりね。

「おばちゃんもユータに『妖怪』買ってきたよ」と勿体ぶると、

「ウソッ!? 早く見せて!」と目を輝かす。

大急ぎで包みを開けて出てきたのは「少年少女版日本妖怪図鑑」（文化出版局）。「妖怪ウオッチ」とは似ても似つかぬ「ガチ」な図柄に顔に縦線、固まっていた。

実は怖がりの私。「怖がるくせに知りたがる」本性を知りぬいている。よせばいいのにさっそく母親に読み聞かせをねだるユータ。

保母さんをしている母親はさすが本職。淡々と読み進めるのがかえって恐怖を誘う。

「ヤッタ！ 神奈川県には妖怪がいない！」「東京はいるけど一つ目小僧だ！」自分の生活圏内にコワイ妖怪がいないことを確かめ、強がってはいるものの安堵を隠せぬ脇の甘さ。

「最近は新幹線もあるし、妖怪も全国あちこちに移動できるよ」とからかうと、再び恐怖のどん底、茫然自失していた。

これで少しは大人しくなるかと思い母親に「効いた？」と耳打ちすると、「効きすぎです…」と苦々しそうにため息をついた。

そして失った自信を取り戻さんとばかり、夫に向かって

「かかって来い!!」

と挑発するも、あっという間に羽交い絞めされコチョコチョ攻め

のお約束。

「ヤメロ！　なにすんだ！　クソオヤジ！　このメガネジジイ!!（↑その通り）」、ヘイトスピーチを垂れ流すユータ。

「参ったか！参ったらゴメンナサイと言え！」

コドモ相手に、ここぞとばかり圧倒的な力を見せつける夫。

「ヤダ！」。笑い死に寸前でも徹底抗戦の構えを崩さないユータに私も参戦。完膚なきまでのコチョコチョ制裁。

「ゴメンナサイ、もうしません！許して！」

ようやく詫びを入れたかと思えば、反省はどこへやら、涙の痕も乾かぬうちに、

「今度はオマエの番だ！」と、しょー懲りもなく着ていたシャツを振り回し、

「バリア!!」と叫んで防衛（威嚇？）に勤しんでいる。

「いい加減にしなさい！」。仕舞に母ちゃんからデコピンくらい、ションボリしたかと思えば、ズボンをペロリとめくって尻を突き出しアッカンベー！

これを「小2病」、「バカ男子」と言わずしてなんと言おう。

夜、ニュース番組を見たがるじいちゃんにチャンネルを渡さず、あまりの粘着ぶりにみんなから総スカンをくらったユータ。

ふてくされているうち、トイレに行きたくなったらしい。

「誰かトイレ行く人！」

相変わらず上から目線の物言いに、（ハハーン、さては妖怪を思い出してトイレが怖いんだな）とみんなが察した。誰も答えずにいると3歳になる妹が「アタシが行くよ」と名乗り出た。はなはだ心もとないお供を引き連れ、それでもなお、

「トイレ出たら、ちゃんと電気消すんだぞ！」

この期に及んで妹に説教垂れて、オトコのコケンにこだわるユータ。ああ、めんどくせーヤツ…。

ヘタレのクセにコワイもの見たがったり、ケンカ自慢でもないクセに煽ったり、そのワリに防衛力は非現実的な「バリア」頼みだったり、叱られて一瞬ションボリしたかと思えば、すぐに忘れて挑発を繰り返したり、逆ギレしてふてくされたり、リーダーシップとやらにこだわったり…なんかこれって我が国みたい！

それでも小学2年なら成長も見込まれ可愛げがある。

一国の振る舞いとなると国際社会からハブられるのがオチ。こんな「アニキ」に付いてきてくれるお供もいるかどうかアヤシイし、しかも「逆ギレて暴走」という過去の歴史もあるだけに…。

小2男子を抱えるかのような「戦後70年」の現実だ。

余談だけど…

この原稿を書き終えた一月末、「邦人人質事件」が最悪の結末を迎えた。

「テロに屈しない」「毅然と」「指一本触れさせない」など、安倍首相の口から強い言葉が繰り返されるたび、「国や宗教、立場を超えて尊敬を集められる態度」について考えさせられる。

少なくとも「強さ」だけで支えられてきた「戦後70年」ではないと思うからだ。

激録！巨大デパート24時

藤井玲子 文／絵

▽お気楽主婦が見た　仰天舞台裏

四年間暮らした輪島を離れ、春から和歌山県に来ている。

輪島の知り合いのオバチャン（66）が、この夏関西のデパートで催される「能登展」に出店するというので、手伝いをすることになった。「デパ地下」どころか、デパートすらない輪島のオバチャンが、大都市に単身乗り込むのを見るに見かねて…のボランティア。ま、道案内と売り場の手伝いくらいはできるだろう…と軽い気持ちで申し出た。

開催日前日。打ち合わせも兼ね、ホテルからデパートまでの道順をオバチャンと一緒に確認。能登の祭よりはるかに多い人混みにも、オバチャンは案外落ち着いていた。「もう一人でも大丈夫や。人について行ったらえーさけ」。一瞬不安がよぎったが、オバチャンの自信あふれる笑顔に押され、明朝の待ち合わせの約束をして別れた。

▽オバチャン遭難開店十分前

いよいよ開催初日。デパートの開店時間は十時。働き者のオバチャンは誰よりも早く売り場に来て、七時半には商品の陳列を済ませていた。

「フジーさん、わて、ホテルに忘れ物してきたわ」

朝礼まで二時間以上ある。ホテルまで十分もあればいけるし、朝も一人で来られたぐらいだから大丈夫だろう。

「いーですよ、あとは見ておきますから」と、取りに帰らせた。

三十分経っても戻ってこなかった時点で予測はしていたが、さらに一時間後、

「人の流れについて行ったら、どこにおるかわからんようになった～」と、泣きの電話がかかってきた。日本海の荒波をものともしないオバチャンも、都会の人波にはあっさり流されてしまったのだった。

地下街まで探しに行ってみたものの、時間切れで捜索断念。

「とにかく○○デパート目指して来て！」と言って電話を切った。オバチャンが戻ってきたのは開店十分前だった。

▽ダメ主婦あきれた言い訳VS派遣執念の教育

朝礼に間に合ったことを安堵したのもつかの間、マネキン会社から派遣されてきた女性に、

「レジの準備や打ち方を事前に教えておきたかったんですけど」と、怒られてしまった。そしてオバチャンがすでにいっぱいいっぱいの様子を見て、

「じゃ、フジーさん、レジお願いしますね」と、まさかのレジ担当に。

レジはてっきり派遣会社の人がやってくれるものと、事前の説明会でもカードや金券の扱いについて、全くヒトゴトのように聞き流していた。

そしてありがたくもメーワクなことに、スキルを身につけさせてあげようという親切心からか、自分がサボりたいからなのか、ハケンの女性はたった4日しか来ない私に、レジの打ち方を徹底的に教え込もうとした。

さらに、

「カードを先にお返しする！」

「お札はお客様の目の前で1枚ずつ数える！」

「袋の取っ手を折らない！」

「試食は子供から！」等々…レジの打ち方だけでなく、一挙一動、「指導」してくるのだった。

いやあ～、五十才近くなってこんなダメ出しくらうとは思わなんだ。人間、失格。生まれてきてすみません…ってカンジ。

そんな私のシゴかれっぷりを、売り場隣のオネエサンは、腹を抱えて笑って見ていた。オバチャンはというと、すっかり元気を取り戻して接客に専念していた。

▽売場完全包囲
能登出身者の一部始終

花火大会で客足が引いていた土曜日の夕方。

「オバチャン！！」。若い男の子が売り場を訪ねてきた。

「あれー、沖クンやないけ？」

「うん、みっちゃんから『能登展』やっとるって聞いて…」

「あー、みっちゃん昨日来とったわ！」

すると遠巻きに様子を見ていた人が近づいてきた。

「もしかして沖？」

「え？　坂本センパイ！！」

よその出店者も加わり、プチ同窓会状態に…。見渡せば催し売り場のあちこちで、

「水産高校の出身やってんわ」

「とーちゃんが門前やさけ」

…能登出身者たちによる小さな輪ができていた。みんな「ここに来れば誰か会える」という気持ちで足を運んでくれていたのだ。

見回り社員の苦々しい表情を察してハケンの女性が、

「あの…もう少し小さな声で」とたしなめても、

「わてら漁師町のモンやさけ、元々声でけーげんて！　なぁ？」

「せやせや！　いつもこんなんや！アハハ」と悪びれもせず居直るオバチャンと能登出身者たち。

買い物客が近づけないほど売り場を包囲しても、気遣うどころか

森原歯科医院
森原敬之
〒七九一―一一三　松山市森松六四三―一
TEL　〇八九―九五六―〇〇六七

ひめ歯科クリニック

井上知則

〒七九一―八〇一三 松山市姫原二―六―一一
TEL ○八八九―九二四―○八八八

「サザエなら実家から送ってくるさけ」と、なにひとつ買わず、しゃべるだけしゃべって帰って行く。しかしそんな能登人たちをオバチャンは満面の笑顔で見送るのだった。

▽人生のプロが語る 大胆スゴ技

仕事上がりにオバチャンとラーメンを食べた。ハケンの女性にこってりやられ、自信喪失していた私を察し、

「わたしらはチームワークで楽しく…がモットーや。なんでも自分が正しいと思って、人が自分の思い通りに動くと思ったらアカン」と慰めてくれた。そして、

「ウチの加工場みてみ？清水サンはちきねー（しんどい）言うて動かんし、新本サンは耳遠いし…」としみじみ付け加えた。

「思い通りにならない」の例えが、肉体的な問題に偏っている気がしなくもないが、

「人は助け合わな生きていけんげんて！」。オバチャンの豊富な経験とたくましい体から発せられる言葉は力強く、新鮮に響いた。

▽派遣まさかの涙 その理由とは

開催6日目。役立たずの私へのストレスからか、マイペースの能登人について行けなくなったのか、派遣の女性は体調不良になってしまった。

「あの人、わたしらと違ごうて身体細いやろ？　せやさけ、神経も細いんや」

オバチャン、ちょっと待って。「わたしら」の「ら」ってナニ？

それでも何か思うところあったのか、催し物の最終日、打ち上げしましょう、と向こうから声をかけてきた。

「わたしらなんか楽しそうらしいわ」

いくら並んで違和感がないからって、「ら」は、ちょっと！

実家の母の通院介助があったので、わたしは参加できなかったが、オバチャンの後日談によると、派遣の女性は意外にシャイで感激屋、最後は涙で別れを惜しんだと言う。

「わたしらみたいなん、初めてやってんと」

だから、「ら」でくくるの、やめてよぉ～！！

結婚してるか、してないとか、子供がいるとか、いないとか、仕事をしてるか、してないとか…なにかと対立させられる私らオンナ達だけど、年齢も立場も超えて弱さを認め合えた時、なんかとてもすがすがしい気分になる。

おかしみ、かなしみを分け合い、助け合う喜びを、能登のオバチャンたちから教えてもらった。

2016-42

『政治的』ってなんですか？

藤井玲子 文／絵

父がなくなって十年になる。昭和六年（一九三一年）生まれ。人に年齢を聞かれれば、「満州事変の年や」と答え、「昭和ヒトケタや」と自嘲気味に付け加えるのが常だった。

例外なく軍国少年だった父は、危急存亡の国難にあたり、卒業後は海軍学校に進学する夢を見ていた。

「海軍は頭のいいヤツしか入れへん。英語も使えて合理性を重んじる。制服がかっこいい。しかも食事がウマいしパンも出る！」。

最後の「食事がウマい」に一番のホンネがにじんでいる気がしなくもないが、ボンボンで秀才（だった）の父にとって、「海軍神話」は父のプライドをくすぐり続け、信仰のごとく死ぬまで揺らぐことはなかった。

七十一年前、父が中学二年の時、敗戦を迎える。

神戸空襲の時、B29に追いかけられ、防火水槽の陰に隠れて命拾いした父にとって、「アメリカ」はとうてい受け入れ難く、進駐軍にチョコレートをねだる日本人が情けなく許せなかったという。

「価値観が一変する」経験を通し、父は政治的なもの一切を嫌悪するようになった。そして「経済は政治とは関係ない。市場こそ公正」と、大学の経済学部に進学した。卒業後は商社マンとして、北米、アフリカ、ヨーロッパ、中近東、東南アジア…文字どおり、世界中をかけまわった。戦時中の不自由を取り戻さんばかり、働き盛りの父の姿は日本の高度成長時代そのものだった。　愛読書は当然、司馬遼太郎「坂の上の雲」。

ストライキには苦々しい顔をし、選挙にも行かず、根っからのビジネスマンだった父は、銀行や官公庁の「護送船団方式」、いわゆる「親方日の丸」を「競争が働かない」と批判し、政治嫌いではあったけど、「戦後政治の総決算」をスローガンに掲げ、「民間活力導入」「構造改革」を推し進めた中曽根首相（↑海軍出身！）を高く評価していた。

そればかりか、「株や投資をしないから金融感覚が身に付かないんや」と、「元金保証」にこだわる堅実な専業主婦の母に業を煮やしていた。

しかしその敬愛する中曽根首相（当時）が一九八五年に実行した「プラザ合意」は急激な円高を招き、輸出を中心とする父の仕事にモロ打撃を与えた。

政治を忌避して経済の世界に身を投じた父。まさか政治によって身動きを封じられようとは。

「経済学部を出ても家計はムチャクチャや」と、母は憤懣やるかたない様子だった。

坂を上りきれば下りは早い。

一九九五年、阪神大震災で被災。二か月後、ストレスから心筋梗塞、脳梗塞と病が続いた。七十才には自宅で介護を受け、やがて入退院を繰り返すようになった。

そして入院が長引いてくると、三ヶ月ごとに転院を求められ、老人健康保険施設やショートステイなどを転々としなければならなかった。体力の残っていない身体にとって環境の変化はそれだけで酷だった。

時は小泉構造改革のまっただなか（二〇〇一～〇六年）。「歳出削減」の掛け声のもと、医療や介護分野への影響は他人事ではなかった。

ある日なにかなぐさめにならないかと、読みたい本でもあるかと聞い

てみた。すると
「坂の上の雲」と絞り切るような声で言った。
当時、松山市のすすめる「坂の上の雲のまちづくり」や記念館建設に反対の声を上げていた私は（サカクモかよ！）と、内心舌打ち。苦笑いするしかなかった。

夏ごろから父は肺炎を繰り返すようになった。すでに口から食事はできず、胃に動脈瘤があるため胃ろうもできず、点滴で命をつないでいた。
「このままだとあと二週間ほどです」と医師に言われるも、「入院は三か月まで」の決まりに例外は認められず、肺炎がおさまると、また次の病院へ移された。
紹介された病院の受付で入院手続きをしていると、父は担架の上から私に向かって、「もう病院を変わらなくてえーんやな？」と念を押すように聞いてきた。
「うん、もう変わらなくていいよ」と答えた。それは父にとって「死に場所」を意味する言葉でしかなかったが、それでも
「ああ、よかった」と心底安心したように笑った。
そして医師の予想通り、二週間後、父は七十四才でなくなった。
病院のベッドから、葬儀屋が用意した担架に移すとき、父の足がダラリと垂れ下がった。
移動のはずみで関節が抜けたのか、それともすでにそういう状態だったのか。生前のやせ細り拘縮した父の足を思い出してみる。
「人間の尊厳」ってなんだ？

火葬場へは新しくできた道路を通って、あっという間に着いた。
こんな立派な道路なんかいらないから、安心して入院していられる病院のベッドが欲しかった。そう思うと父が哀れで泣けてきた。
父は「政治」を毛嫌いしたけど、仕事や病気を通して少なからず父を苦しめたのも、「政策」や「制度」、つまり「政治」に他ならなかった。

小泉元首相をはじめ、「坂の上の雲」を愛読書にあげる政治家やビジネスマンは多い。若く強くて元気な人たちが、海軍のスマートさや合理性みたいなものに惹かれ、小説の主人公たちに自分を重ねる気持ちはわかる。かつて父がそうだったように。
だけどそんな人たちが、若く強くて元気なうちに、自力ではどうすることもできない人たちや、いずれ父のように老いて死んでゆくことを少しでも想像してくれたら…と、父を看取って強く思う。

「アジアで最初に立憲政治を打ち立てて、独立を守り抜きました。日露戦争は植民地支配のもとにあった、多くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました」。
昨夏、戦後七十年の「安倍談話」を読んで、わたしは真っ先に「坂の上の雲」を思い浮かべた。

年明けて二〇一六年二月三日。
「強い日本」を掲げる現政権は衆院予算委員会で、「戦力不保持」を規定した憲法9条2項の「改正」まで言い出した。
安倍サンが「サカクモ」を読んでいるかどうかしらないけど、コイズミさん以上の「弱い人の姿がちっとも見えてこない強い国志向」に不安を覚える。
私が父ほどにあの小説を屈託なく接することができずにいるのは、そんな理由からだ。

2016-43

分断されない

※イベント向け歌の練習中

藤井玲子 文／絵

二〇一五年九月十九日、従来の憲法解釈で禁じられていた集団的自衛権行使などを盛り込んだ、安保関連法が強行採決された。

自分なりに反対の意思を表明したいと思っていた時、地元の「ママの会」を知り、以来、「ママ」ではないけど、活動に参加させてもらっている。

私より干支が一回りも若いママさんたちが集まる「ママの会」は、「子供達に戦争のない平和な世の中を残していきたい」という素朴な思いから結成された。

二〇一三年十二月に成立した秘密保護法に危機感を持ったのをきっかけという。私が「なんか、おかしいよな」と思い始めたのがイラク戦争（二〇〇三年）の頃だったから、かつての自分を見るような思いで、ママさんたちと接している。

とはいえ、ママは忙しい。月に一度の「女子会」と称するミーティングも、「子供が熱を出した！」「眠ってしまって動けない！」…等々、アクシデントなどあって当たり前。全員揃うことの方が珍しい。集まったところで、子供が走り回るわ、おとなしいな…と思いきや壁にマジックで落書きしてるわ、おもちゃの取り合いするわ、おっぱいねだるわ、ハイハイでどっか行っちまうわ、ジュースこぼすわ…汗と涙と砂糖にまみれて子供たちと格闘する私をよそに、「あーあー」なんて苦笑いして見守るママさんたち。「おかあさん、エライッ!!」。頭が下がるばかりだ。

「原発」の問題もママさんたちの関心事だ。3・11の事故によって、食の安全や環境問題に向き合わざるを得なくなった。

そして格差問題も横たわる。

「自分が親にしてもらったことを、子供に対してしてあげられるだろうか」…。

特別なことを要求してるわけじゃないのに、生きていくこと自体に困難さを感じる…そんな不安

や切実な思いが口をついて出る。
子育ての経験こそないけど、介護や老後の不安など、相似形で身につまされる。
男だとか女だとか、若いとかそうでないとか、仕事してるかしてないかとか、結婚がどうのとか、子供がいるかいないとか…そんな具合にバラバラにされてしまった私たち。足を引っ張り合ってたら誰かの思うツボな気がする。
分断されない。集まって、とにかく喋ろう。

ママさんたちの特筆すべきはその行動力だ。思いつきでなにか言おうものなら、「よし、やろう!」とすぐに腰が上がる。講演会、映画の上映会、歌のコンサート（自分達で歌う）…子供の手を引きながら、或いは保育園に預けている合間を縫って、チラシの印刷や会場の手配、人集め、会計など、できることをそれぞれが引き受ける。
先日集まったときのこと。

「紙芝居とかやりたいよね」と誰かがいうと、「いいね!じゃあお菓子を配ろう! ビスコとかっぱえびせんでえーかな!? アレルギーの子は…」みたいに、自分が子供になったみたいに盛り上がる。 私もつい、「ロンパールームみたいに、みんなで牛乳飲むとか!」と口を挟むと、「ロンパ…?」とみんな一瞬静まった。「ロンパールーム」をご存じない世代だったのだ。分断…されない。

慌てて話題を変える。
「保育園、落ちた…ってのがあったけど、この町は子供が少ないから、待機児童とか大丈夫でしょ?」とふると、
「それが…市町村合併で大きな町の基準に合わされちゃって…ウチの地区は子供の人数が少なすぎて学童保育が作れないんです」
なんと。わかっているつもりで知らなんだ。やっぱり話してみるもんだ。
そしてそんな事情をものともせず、彼女は友達と子育てサークルを作り、野外保育の講習会へ行ったりして好きなようにやっている。いつもなら「それは行政の仕事だ!」と目をつり上げてしまう私だが、彼女の楽しそうな様子と気負いの無さに、自由でいいよな…と自分の狭量さに気づかされる。
しかしそんな彼女にも悩みがあった。
夜なべで作った安保法反対のチラシをみんなに配りながら、「最近、ママが政治的だ、とダンナに引かれるんです」と苦笑い。
「わかる!なんで戦争反対って言ったらアカンのやろ?」
「家族を説得するのが一番ムズカシイよね」
一同頷く。私はまたしょー懲りもなく「近隣諸国との外交が一番難しいのと一緒だね」と口を挟むと、今度は思いがけず尊敬の眼差しが返ってきた。えっ? なに、私、長老!?
保育園のお迎えの時間でお開き。お昼寝してしまったハル君をそっとチャイルドシートに移し、寝顔に小声で語りかけた。
「ぐっすり寝てますねー!」
往年の「寝起きドッキリ」をマネたつもりが、「なんですか?」三十五才のママに軽くスルーされた。分断、されない。…というか、ついていくのが精一杯だ。（涙）

2017・44

バックトゥザ明治維新!?

藤井玲子 文／絵

「安倍首相がんばれ！安保法制国会通過よかったです！」

このところテレビで毎日、運動会で選手宣誓する幼稚園児の姿が映し出されている。

いやぁ～…来るとこまで来たなぁ…てか、こーゆーことさせるの好きな人っているよねぇ…と、四十年ほど前のことを思い出した。

わたしが小学校四年生頃、新しく赴任した校長先生の趣味（主義？）か時代の要請か、「管理教育」の風潮が強まったことは以前も書いた。

「教育勅語唱和」こそなかったが、廊下は腕を大きく振り上げ行進で右通行（曲がるときは直角）、掃除は無言で床や壁を雑巾で磨き上げ、給食は「三角食べ」、授業では指先をピシッとそろえて挙手、大きな声で発言。

シャイでドンくさいわたしにとって「地獄の特訓」、日々のマラソンも加わり五年生で激ヤセ、卒業式では声が出なくなった。

「ストレス」という言葉もない時代、自分の息苦しさを見つめ直すこともなかった。

が、しかし…。人は慣れる。

いろんな小学校の生徒が集まる中学校に入るや、ユル～い雰囲気（↓これが普通）に耐え切れず、あれほど苦労したはずなのに、

「なんだこのダラけた人たちはっ！　私は染まらないぞ！」と、戦後生まれに厳しいまなざしをむける戦中派のような気分だった。

で、結果から言うと、「精神力」が通用するのは最初だけ。「芯が揺らぐ」どころか、ゆがんだエリート意識をこじらせ、性格のキツさだけ残った。何事もほどほどが肝心だ。

「こじらせ」（こじつけ？）といえば、今年は「坂の上の雲ミュージアム」の開館十周年。さまざまなイベントを打ち立てていることだろう。

「非常にしつこい」と突き放されそうだが、ざっくりおさらい。

ミュージアム建設計画を知ったのは二〇〇四年三月頃。わたしは展示物が無く維持が難しいこと、戦争の負の側面をどう伝えるのかなど、新聞の投書欄やビラなどで違和感を訴えた。

反対の声に対し、当時の市長（現知事）や担当部署は「まちづくりによって市の財政に好影響を与え、教育、福祉を充実させる財源の確保につながる」とか「戦争賛美にはならない。主人公達の青春群像だ」などお役所答弁を繰り返すばかり。

そもそも「坂の上の雲」は原作者の司馬遼太郎さん自身が「ミリタリズムを鼓吹していると誤解されるおそれがある」と映像化を禁じていた作品。

ＮＨＫドラマ化の追い風を受けていたとはいえ、「ハコモノ」を建ててしまえば、ドラマが終わっても公共の場で延々とやり続けることになる。それって、どうよ？

…というのもその頃、日露戦争百年、終戦六十年、自民党結党五十周年…いろんな節目の年を前に、「この国のかたち」と司馬さんの言葉を借りて、「憲法改正」がさかんに語られていた。（今もだけど）

二〇〇四年二月。陸自のイラク派遣で護衛艦が出航する際、軍艦マーチが流れ、元防衛庁長官が、「皇国の興廃この一戦にあり」と、日露戦

争の東郷平八郎司令長官と同じ号令を下したという。

「国民国家が一つになって目標に立ち向かう明るい明治の物語」は、グローバル経済を勝ち抜くイメージと重ねられ、当時の首相（小泉さん）にも、松山のまちづくりは持ち上げられた。

時は流れて…。司馬さんの心配は杞憂だったろうか？わたしの違和感はこじらせオバサンの、前のめりな思い込みだったろうか？

政策をあげると、「愛国心」を盛り込んだ「教育基本法」改定、防衛省昇格（二〇〇五年）、憲法改正手続きを定める国民投票法（二〇〇七年）、特定秘密保護法（二〇一三年）、集団的自衛権を認めた新安保法（二〇一五年）、今国会（二〇一六年）では共謀罪が上程されている。

実生活では、護憲集会の後援に行政が難色を示すようになった。「9条守れ」とうたった俳句が公民館の会報からはずされたこともあった。国旗国歌を拒否した教員は処分され、「政治的中立」は、より厳しい罰則を伴うよう検討されている。

テレビや書店には「日本スゴイ！」の情報があふれ、政府に異を唱えたり、少数派や他国民に気持ちを寄せれば「反日」「サヨク」と「非国民」認定。

そうそう、「はだしのゲン」を図書館から撤去というマンガみたいな話もあった。

愛媛では、二〇一六年度より県と四市町の公立中学で、「独自色の強い」歴史教科書が採択されたり、高校生の政治活動が事前届け出制になった。

そして来年は明治維新から百五十年、「明治の日」を制定するのだとか。

「明治の精神に学び、さらに飛躍する国へ」って、どこかで聞いたような…。

「曲がり角」をすっかり曲がってしまった今日この頃、「坂の上の雲のまち」はどこへ向かう？

話は戻って、先の幼稚園。教育内容や、母体の学校法人の小学校設置をめぐる政治関与が問題になっている。

国会で野党議員に「教育勅語唱和」について問われ、安倍首相は「私学の教育方針に云々申し上げる立場にない」。表彰状を送った稲田防衛大臣も文科省審議官も「教育勅語の中には親孝行とかいい面もある」「適切な配慮のもとに活用していくことは、差支えない」だって。

そういえば、サカクモまちづくりの「ディレクター」という当時中心人物だったおじさんも、教育勅語の「父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し」などの部分を引用し、日本人が忘れてはいけない道徳を感じると、「坂の上の雲のまちづくりに通じるものがある」と語っていた。（二〇〇四年八月二十二日愛媛新聞）

「教育勅語」つながり。…ってゆーか、「教育勅語」は「賞味期限切れ」…じゃない、「使用禁止」になったはず。

「このクセがたまらん！」と大好物なマニアの方は、どうかこっそり召し上がっていただけないでしょうか。

「個人の価値」「平和主義」を理念とする現行憲法とは食い合わせが悪すぎる。

「つまみ食い」をすすめられても断った方が無難だろう。

修学旅行の余興はなぜか「天の岩戸」
疑問も持たずに熱演！

2017-45

管理人は見た！

↑感情労働ができない人

藤井玲子
文／絵

大阪でアパートの管理人のバイトをしている。

「マンションの受付のお仕事です」の求人広告に応募して、入ってみたら私の年齢と変わらない築年数のおんぼろアパートだった。

もちろん「めぞん一刻」のような大学生とのロマンスなど程遠く、老人と外国人が占める、日本の行く末のような場所だった。

仕事の引継ぎは梅雨の時期に始まった。前日から雨が降り続き、さすがに今日はヒマやな～…と、のんびり構えていたら、若いサラリーマンが血相を変えて駆け込んできた。

「トイレの汚水が逆流してます！ ドアを開けたら流れ出しそうで家の中にも入れません!!」

ええっ、なにそれっ!?

大急ぎで設備会社に連絡。戻ってきた作業員に部屋の状況をたずねると、「思い出したくない」と首を振ってうなだれた。

騒ぎが収まったかと思いきや、今度はタオルを首に巻いたおばちゃんが、飛び込んできた。

「大変や！ サッシから水がしみ込んで、窓の周りがビシャビシャやっ!!」

状況がのみ込めず首をかしげていると、おばちゃんは思い出したようにスマホを取り出し、画像をグイと突きつけた。左右上下がわからないけど、窓、床……四方八方、雑巾で敷き詰められ、確かに「大変」なことはわかった。

引継ぎのため一緒にいたベテランSさんは、「大雨の日は絶対なんかあんねん……」と、深いため息をついた。

アパートも古ければ住民さんも年季が入っている。日常の細々したことが自分でできなくなり、相談にやってくる。

「電気がつかへん！」と、オシャレ杖をついたおばあさん。

接触不良かと思って話を聞けば、おそらく電池切れ。

「電器屋さんに聞いてみましたか？」と尋ねると、「クーラーの

取り付けで忙しいから来られへんって言われてん」。電器屋さん、お金にならない仕事はせーへんつもりやな。

所属先の管理会社からは、住民の部屋へは立ち入らないように言われているので、「業者を呼ぶと有料ですから、ご家族さんにやってもらってください」と事務的に伝える。

そばで聞いていたSさんは、おばあさんの杖に目をやり、「骨折、治りましたか? 無理にご自分で取り付けようとしないでくださいね」と、「神対応」。パチパチ‼

私も少しはSさんを見習わねば!と思った矢先…おじいちゃんが「電話つながらへんねん…」とヨロヨロやってきた。

携帯を持っておらず、代わりに事務所からNTTに連絡。

「今日、午後から大丈夫ですか?」

業者の間に入って伝えると、「今日は今からデイサービスで出かけなアカン。そっちで決めておいて!」と日程調整まで私に押し付ける。そしてそれまでのヨロヨロぶりとはうって変わって、「ほな、よろしくっ!」と元気に立ち去ったかと思えば、クルッと振り返り、「あっ、せや。電話代!」と、ズボンのポケットから小銭を探すしぐさ。小芝居に付き合ってやる余裕もなく、「あ〜、いいですよ」と素っ気なく答えた。

翌朝、「電話、つながったわ。おおきに!」とわざわざ連絡があった。お年寄りの律義さに、「塩対応」をちょっと悔やんだ。

ある日、二人組のおばさんがやってきた。

「ミヤモトさんの家はどこですか?」

Sさんによると、この二人は揃って認知症で、(それでコミュニケーションを取れているのが不思議だが)、町内会長の「ミヤモトさん」を一日中捜し歩いているのだという。それだけならともかく、アパートの住民の部屋を深夜早朝構わずベルを鳴らしたり、入り込んで怒鳴ったりするため、苦情が来ているのだとか。しばらくして地域包括センターの世話で、老人施設に入ることになったそうだ。

認知症トラブルなど日常。ベランダから布団やゴミを放るおじいさんや、「天井から煙が下りてくる」「コビトがおる」と訴えに来るおばあさん…もはや「老人ホーム」のバイトと変わらない。

現実は小説よりも奇なり。アパート前の違法駐輪を許さない「自転車オジサン」による行き過ぎた「取り締まり行為」(↑ほぼ恫喝)。生ごみを部屋で腐らせウジ虫が大量発生。「孤独死」を疑われ、警察&レスキュー沙汰になった「うじむしオジサン」事件。ラマダン明けに友達を呼んで大騒ぎする外国人留学生、風呂場にペンキで「富士山」を描き、勝手に「銭湯」にリフォーム。退去後に発覚した「ビフォー&アフター事件」。保安員さんが夜間巡回で時折見つける「絨毯と布団」。夫婦喧嘩で出て行った奥さんが屋上に住んでいるのでは?という「伝説」もある。

事件は現場で起こってますよっ!って、心の中で叫んでも管理会社のエライさんには届かない。

四角い仁鶴さんに丸く収めてもらいたいほど、私の目が三角に吊り上がる日々だが、切ないこともある。

七十歳過ぎて家賃が払えなくなったと遠くの市営住宅へ引っ越す一人暮らしのおばあちゃん。環境が変わって大丈夫やろか。

同居で母親の介護をしている私と同い年くらいの男性。自分の健康管理が後回しになってへんやろか。

「星影のワルツ」が一日中聴こえる……と訴えにくる認知症のおばあちゃん。それって、おじい

ちゃんの好きな歌やったんやないの？

一人で生きていくさみしさ、困難さをかみしめる。

……なんて感傷に浸る間もなく、新しい入居者がやってきた。カタコトの日本語を操る若い外国人男性。カタコトの英語で「ごみの分別」を説明。

「ナンデ、ゴミヲ捨テルノニゴミ袋ヲ買イマスカ？」と、指定ごみ袋に異議アリ、のご様子。知らんがな。でも、ま、確かに。「ニッポン　スゴイ！」。逆のイミで。

私のぶすくれ顔を見かねてか、ある日管理会社の上司がこう言った。

「何事も感謝！やで。やらされてると思うからアカンねん。させてもろてる！と思わな。せやろ？感謝や、感謝っ!!」。そっか、「感謝」か。なるほど…。

「終業間際に手続きに来るオッサンに感謝！」

「ペラペラ窓口に喋りにきて帰らないオバハンに感謝！」

「ゴミ出しルールを守らない外国人に感謝！」

「わずかな管理費しか払ってないのに、『管理が悪い』と文句を言いに来る住民様に感謝!!」…

夕食時に一人「感謝！」で盛り上がっていると、夫がポツリ。

「言ってることとやってることが違う。アベさんの『ていねいに説明』みたいや…」。

私に睨み返され、慌ててビールを流し込んでいた。

水木歯科医院

水木孝志

〒七九〇―〇九三二　松山市東石井三丁目一―三

TEL　〇八九―九〇五―一五一五

2012・46

なんでもない日々

藤井玲子
文／絵

五十歳の誕生日を前にがんが見つかってしまった。

春頃から鎖骨にイボができていた。年を取るとできるヤツだと思ってうちやっていた。ちょうどバイオリンを弾くときに当たる部分でもあったので、多少の腫れは「練習の賜物」とばかり、さして気にも留めなかった。

三か月ぶりに海外から帰ってきた夫が一見して、「早く診てもらえ」と急かす。日ごろ「大丈夫」が口癖の夫だけに、私もいそいそとネットで調べた美容皮膚科へ出かける。すると「念のためもっと大きな病院で診てもらいましょうね」と、紹介状を渡された。

市立病院で即手術。看護師さんは「でんぼ（↑大阪弁でイボのこと）が取れてスッキリしましたねぇ」と晴れやかな笑顔。私も「でんぼ」というユルい響きにつられて笑った。

十日後、組織検査の結果、「メラノーマ」という皮膚がんであることがわかった。

患者数が少なく、再発や転移が多いやっかいなヤツらしい。

「残念やけど…」と切り出した先生だが、私はなんかもっと別の理不尽さにとらわれていた。…というのも、私の家系は、父方、母方いずれもご長寿系だ。

自分で言うのもアレだが、勝手気ままなストレスフリーの性格、食いしん坊ゆえそれなりの食生活を送り、そのくせ心配性なので体の異変には敏感なつもりだった。

折も折、九十歳の女性作家の本がベストセラーとなり、寂聴サンもご健在、画家や染色家、カメラマン、ブロガー、ファッションモデル…高齢者のご活躍ぶりは百花繚乱といったところ。

雑誌に目をやれば、「超高齢化社会を生きる」「長生きリスク」の見出しが踊り、おまけに現政権にいたっては「七十歳からの年金支給を支援」とか言ってるし…。

たいして芸のない私は、「長生き」さえすれば、それなりのありがたみが備わり、あわよくば「愛され老人」となって、老人ホームで正月早々餅を詰まらせて大騒ぎ、最後は職員さんに見守られ…私なりに「長生きリスク」へ対応するつもりでいた。

「長生き」の風潮に流され、自分もすっかり「その気」になっていた。うかつだったぜ！

「カミングアウト」も迷った。

病気のことは、なるべく人に知らせたくなかった。「余計な心配をかけたくない」という私なりの強がりもさることながら、公表した人に対して、「あの人、がんの割に元気や」とか、「やっぱりがんでなくなった」みたいな、自分が向けていた視線（↑偏見！）がそのまま自分に返ってくるのがこわかった。

親しい人に打ち明けるだけならともかく、まして文章に書き残すなんて…。他人の闘病記だって怖くて読めないのに…。

「後から読み返して、あの時あんなこと考えてたのかと思った

り、自分の気持ちの整理のためにも、書ける人は書いた方がいいよ」「思春期の日記だと思えばいいんだよ」と、記録することをためらう私の背中を押してくれたのは創風社出版の大早さんご夫妻だった。

前のめりでせっかちな宿主に似たのか、昨年末に転移が見つかり、術後の検査でまた新たな転移が見つかった。これから新しい治療法を受けることになる。

親戚も遠方、子供もいないので、急なことがあったときに手伝ってくれる人が必要だ。二人の友人に状況を伝え、助けを求めた。夫がひとりで背負い込まないためにも、隠すより、人に託し、力を借りることにしよう。開き直りは肝心だ。

キクエ嬢は「私のことを思い出してくれてありがとう」と快く受け止めてくれた。そして生活スキルの低い夫に後添えを探してやってくれと頼むと、「何言ってるの！共白髪よ。ご主人と長生きしなきゃ！」と明るく笑ってスルーされた。

ちょっと天然のユウコ嬢に、

「節分に太巻き作ったよ…最後かもしれない…と思うと、めんどくさかったけど作ったよ…」と暗ーく言うと、

「作ったの⁉　スゴイ！　かんぴょうも炊いたの？　じゃあひな祭りはちらし寿司ねっ⁉」と、思いがけない球が返ってきた。

「うーん、ヤなこと思い出させるなぁ…まぁ、めんどくさいけど作るか…」

「そうだよ～。作らなきゃ！　その次は何作って…って、そうやって時間が過ぎたらいいよね！」

女性の優しさ、明るさに救われる。

女性ばかりではない。しばらく疎遠だったケアマネをしている男性の友人も、「相談に乗るよ」と言ってくれた。人づてに聞いていても、知らないふりをしてくれる人、おしみなく手を差し伸べてくれる一人一人の力のなんと大きなことか…。

がんがわかった時、親の介護や人の世話をしてきたつもりでいた（↑頼まれたわけでもないのに）私は、

「人にしてあげてばかりの人生で割に合わない！」と釈然としなかった。だけど、今、思いがけない形で、思いがけない人から恩恵を受けている。

もしかしたら私のきまぐれなおせっかいも、誰かの大きな力になっていたのかもしれない。そう思うと、「割に合わない」気持ちが遠のいた。

とはいえ、お悔やみ欄では年齢ばかりに目が行き、初めて行ったお店で、「ポイントカードどうしますか？」と聞かれようものなら、「いっぱいになる前には…」との思いが頭をかすめ、使い捨てカイロの使用期限を見ては、「カイロの方が長生きかも…」。

持ち前の妄想力も手伝って、ネガティブの底なし沼に…。日々、メメント・モリ。他人から見れば、ドリフのコントだ。

そんな時、松山に住むタケ子さんから、オーガニックコットンの腹巻付きパンツ（↑おしゃれなやつ）が見舞いとして届いた。

早速履いてみる。やわらかい感触に、お腹も心もすっぽり幸せな

水木歯科医院
水木孝志
〒七九〇―〇九三二　松山市東石井三丁目一―三
TEL　〇八九―九〇五―一五一五

気分に包まれる。

思えば病を得てから、「後悔のないようにやるべきことをやっておこう」と意気込むものの、「大志」などない私は、通帳をまとめたり、住所録を作ったり、不用品を処分したり…終い支度ばかりに気をとられていた。

腹巻パンツから伝わる温もりに、「厳しい環境にあっても少しでもより良く生きよう」と、タケ子さんからエールを受けた思いがした。

翌日、大阪のデパートへ行き、入院に備え、件のオーガニックコットンの品をいろいろ買い揃えた。がん患者の女性がブログでスキンケアについて書いてあったのを思い出し、敏感肌用の化粧品も買ってみた。記録用のキティちゃんのノートとか。

買い物袋を抱えて帰ってきた私を見て夫は、

「毎日家事をしたり、心地よいものを身の回りに置いてやり過ごそうとしたり…だから女性は強いんやな…」と感心していた。

がん患者の目標は、「治すこと」ではなく「いつもの暮らしに戻ること」と、看護師さんに教えられた。

お稽古を休むのに病状を伝えたバイオリンの先生の奥様からは、「ちゃんと食べれてる?!」と励まされた。

他人であろうと「ちゃんと食べれてる」が一番気がかりなのがおばちゃんの真骨頂。

私にもしっかり受け継がれている。

ちゃんと食べて、笑って、泣いて、怒って…なんでもない日々を、よく生きよう。

近況

あれだけ悪口ばかり言ってた愛媛の人に、なにかと世話になっている。お見舞いの温泉せんべいをかじりながら、この借りをどう返したらいいものかと悩んでいる。